

山ノ神

—長野県塩尻市山ノ神遺跡発掘調査報告書—

1985

塩尻市教育委員会

山ノ神

—長野県塩尻市山ノ神遺跡発掘調査報告書—

1985

塩尻市教育委員会



第36号 小竖穴·伏襄

序

山ノ神遺跡は塩尻市大字片丘南内田にあり、高ポッチ山麓の小舌状台地に位置し、以前より縄文時代中期の遺跡として知られていました。この度、長野県松築地方事務所所管の東山山麓地区農道整備事業が塩尻市内に始まり、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査を委託されたものであります。

発掘調査は耕作が終了した昭和59年10月中旬より同11月はじめにかけて行われました。調査区が遺跡のはずれにあたったため当初はその成果があまり期待されていませんでしたが、調査の結果、予想に反して数多くの遺構・遺物が確認され、該期の集落の性格を捉えていくうえで極めて貴重な資料を提供することになりました。

終りにあたり本調査にご理解、ご協力を下さいました調査員の先生方をはじめ、地元関係役員の方々、また作業に献身的にご協力いただいた地元の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和60年1月

塩尻市教育委員会

教育長 小 松 優 一

例　　言

- 1、本書は、昭和59年度東山山麓地区農道整備事業に伴う、松筑地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和59年10月16日から11月6日にわたって発掘調査が行われた塩尻市大字片丘南内田地区における山ノ神遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、調査経費については、松筑地方事務所からの委託金および国庫・県費補助金による。
- 3、本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。
　遺構…整理、トレース：鳥羽、三村、腰原。
　土器…復元：市川、三村、腰原。実測：三村、腰原。拓本：小林、鳥羽、三村。トレース：三村。
　石器…実測、トレース：小林。
　図判組み…鳥羽、小林、三村。
　写真…鳥羽。
- 4、本書の執筆は各調査員・調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。
- 5、本書の編集は小林、鳥羽が行った。
- 6、本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第I章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第4節 遺跡の状況と面積	4
第II章 遺跡周辺の環境	5
第1節 自然環境	5
第2節 周辺遺跡	7
第III章 遺跡の概要	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 発掘区の設定	10
第IV章 造構	13
第1節 ロームマウンド	13
(1) 第1号ロームマウンド	13
(2) 第2号ロームマウンド	14
(3) 第3号ロームマウンド	14
(4) 第4号ロームマウンド	15
(5) 第5号ロームマウンド	16
(6) 第6号ロームマウンド	17
(7) 第7号ロームマウンド	18
(8) 第8号ロームマウンド	20
(9) 第9号ロームマウンド	20
(10) 第10号ロームマウンド	20
第2節 小竪穴	22
第3節 集石	27
第4節 溝状造構	33
第V章 造物	34
第1節 土器	34
第2節 石器	39
第VI章 調査の成果と課題	41
第1節 ロームマウンド	41

第2節 片丘の縄文遺跡	44
第VII章 まとめ	55
第VIII章 結語	56

挿図目次

第1図 山ノ神遺跡位置図.....	6
第2図 山ノ神遺跡付近の地形断面図.....	7
第3図 山ノ神遺跡周辺遺跡分布図.....	8
第4図 山ノ神遺跡調査地区図.....	11
第5図 山ノ神遺跡遺構全体図.....	12
第6図 第1号ロームマウンド.....	13
第7図 第2号ロームマウンド.....	14
第8図 第3号ロームマウンド.....	15
第9図 第4号ロームマウンド.....	16
第10図 第5号ロームマウンド.....	17
第11図 第6号ロームマウンド.....	18
第12図 第7号ロームマウンド.....	19
第13図 第8号ロームマウンド.....	19
第14図 第9・10号ロームマウンド.....	21
第15図 小竪穴群(1).....	23
第16図 小竪穴群(2).....	23
第17図 小竪穴群(3).....	24
第18図 小竪穴群(4)・溝状遺構.....	25
第19図 小竪穴群(5).....	26
第20図 小竪穴群(6).....	27
第21図 小竪穴群(7).....	28
第22図 小竪穴群(8).....	29
第23図 小竪穴群(9).....	30
第24図 集石・第36号小竪穴.....	30
第25図 第36号小竪穴甕出土状態図.....	31
第26図 第36号小竪穴甕No 3出土状態図.....	31
第27図 第36号小竪穴甕.....	35
第28図 第22号小竪穴出土土器.....	36
第29図 遺構内出土土器.....	37
第30図 遺構外出土土器(1).....	38
第31図 遺構外出土土器(2).....	39
第32図 出土石器.....	40
第33図 山ノ神遺跡ロームマウンド長軸方向.....	43

第34図 男星敷遺跡全体図	46
第35図 男星敷遺跡出土土器	47
第36図 女夫山ノ神遺跡全体図・出土土器	48
第37図 女夫山ノ神遺跡出土遺物	49
第38図 中原遺跡全体図・出土土器	50
第39図 稲原遺跡全体図	51
第40図 稲原遺跡出土土器	52
第41図 小丸山遺跡全体図	53
第42図 小丸山遺跡出土遺物	54

表 目 次

第1表 発掘調査経過表	4
第2表 小竪穴一覧表	32
第3表 山ノ神遺跡ロームマウンド一覧表	41

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

- 1月10日 昭和59年度文化財関係補助事業計画について（提出）
4月10日 昭和59年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
4月10日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
5月1日 昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
5月23日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（提出）
6月20日 昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
6月20日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）
9月19日 東山山麓地区山ノ神遺跡発掘調査委託契約について
9月21日 市耕地課による現地説明
10月11日 埋蔵文化財包蔵地山ノ神遺跡の発掘調査について（通知）
11月8日 山ノ神遺跡埋蔵文化財の取得について（届）
12月5日 山ノ神遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査計画書（一部のみ記載）

2、遺跡名 山ノ神遺跡

4、発掘調査の目的及び概要 開発事業農村漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓
土地区に先立ち350m³以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭
和59年11月15日までに終了する。調査報告書は昭和60年3月31日までに刊行するものとす
る。

5、調査の作業日数 発掘作業10日 整理作業10日 合計20日

6、発掘調査委託費 発掘調査費全額 2,500,000円 文化財農家負担軽減額（一） 585,000
円 計 1,915,000円

7、調査報告書作製部数 300部

第2節 調査体制

団長 小松 優一 (塙尻市教育長)
担当者 小林 康男 (日本考古学協会員、市教委)
調査員 烏羽 嘉彦 (長野県考古学会員、市教委)
山本 紀之 (")
百瀬 忠幸 (")

調査補助員 前田清彦、三村 洋、腰原典明、松本建速、山本淳子、小林 享。
参加者 米久保勇、清水年男、中野やすみ、小松幸美、林 功、小林ひろ、青柳みさ江、赤羽房子、池田くわ子、池田千香子、池田貴江子、池田ほまれ、池田絹江、池田百合子、池田ちか子、花村栄子、花村くにゑ、古瓶さち子、丸山かほる、南沢みや子、百瀬照子、百瀬英子、百瀬武恒、百瀬直美、横山きよ子、横山礼子、横山つや子、青柳ふき子、菊池みな江、小松鈴子、小松咲子、小松ます子、熊井里子、五味ますみ、小松 学、小松三枝子、中島千春、中島房美、花村久子、花村奈津子、花村はま子。

事務局

市教委総合文化センター所長 二木三郎
〃 文化教養担当課長 清水良次
〃 文化教養担当副主幹 中野 栄
〃 文化教養担当主事 烏羽嘉彦
〃 平出遺跡考古博物館学芸員 小林康男

協力者

南内田地区関係役員	花村寿雄
〃	桜井哲郎
〃	百瀬芳澄
〃	百瀬開太
〃	米久保岱三
地権者	池田嘉登
	村上英文
	花村鶴雄
	百瀬久夫
資料協力者	横山きよ子

第3節 調査日誌

昭和59年10月16日（火）晴 藤牧建設の重機により表土除去を行う。発掘器材・テントを現地へ搬入するが強風のため設営できず。

10月17日（水）小雨 昨日に引き続き重機による表土除去および地均しをする。

10月19日（金）小雨 本日から本格的発掘作業開始。最初に文化教養課長の挨拶があり、担当事務局の紹介のあと小林調査担当より経過報告。終了後、受付を行い直ちに作業に入る。また一班はテントを設営する。調査区の北側と南側に作業員を分け、それぞれの方向から助簾により遺構検出をする。昼頃、雨が激しくなったため作業を中止する。

10月20日（土）雨 雨天中止。

10月21日（日）晴 定休日。

10月22日（月）快晴 遺構検出を継続。全域で6ヶ所のロームマウンドを検出。小豎穴を9基検出し掘り下げる。

10月23日（火）快晴 ロームマウンドが9基になり第1号～第9号ロームマウンドとする。第1・2・3・4・5・9号ロームマウンドに30cm幅のトレンチを東西方向に入れる。調査区のはば中央に横切るように溝状遺構を検出、5ヶ所断面を切る。1号～20号小豎穴のセクション図化。調査区南端に集石を検出。快晴無風の日が2日続き作業捗る。

10月24日（水）快晴 5m間隔のグリッドを設定する。第1～第9号ロームマウンドの検出面での写真撮り、終了後、トレンチを入れる。小豎穴セクション図化。22号小豎穴で砾・炭に混じって多量の土器片出土。南端に集石が確認されたため3m南側へ拡張する。

10月25日（木）晴 第3・6・7・8号ロームマウンド平面図図化。第2・4・5号ロームマウンドセクション図化、写真撮り。小豎穴は33号までセクション図化完了。2・3・25号完掘、写真撮り。市耕地課3名、県埋文センター2名来訪。

10月26日（金）快晴 秋晴れの良い天気が続き作業捗る。第3・8号ロームマウンドセクション図化。1・4・5・7・8・11・21・24号小豎穴完掘、写真撮り。22号小豎穴の遺物出土状態を図化、写真撮り。溝状遺構を掘り下げ完掘する。U字形の断面を呈し底部に砂、腐植土などの水の流れた痕跡は認められなかった。

10月27日（土）晴 第2号ロームマウンド完掘。第6・7号ロームマウンドセクション図化。第1号ロームマウンドを掘り下げたところ小豎穴（37号小豎穴）と根穴であることが判明。溝状遺構測図。

10月28日（日）曇 定休日。

10月29日（月）晴 朝方雨が残る。冬型になり寒い一日だった。22号小豎穴の西側半分も掘り下げ、上面から-10cmで半完形土器出土。集石の平面図化。

10月30日（火）晴 昨日以上に冷え込む。テント南側に新たなロームマウンドを検出、欠番の1号を付ける。掘り下げセクション図化、写真、平面測図。22号小豎穴遺物出土状態図化。集石平面図化。第3・5・8号ロームマウンド測図。

10月31日（水）快晴 ロームマウンド写真撮り。22号小堅穴完掘、測図。集石セクション図化。一部を除き作業員は本日で終了。記念撮影し午後の休憩時間に遺跡説明会を開く。

11月1日（木）曇 集石の礫を取り上げ、下の落ち込みを完掘、測図。36号小堅穴の伏窓の出土状態を図化し取り上げる。集石西側で新たにロームマウンド2基検出、第9・10号ロームマウンドとする。セクション図化、測図。

11月2日（金）雨 雨天中止。

11月6日（火）快晴 調査区の全体写真。器材片付け、撤収作業。

出土遺物の洗浄作業は現場作業と平行して行なわれたが、その他の整理作業は11月～3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の註記、復原作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の拓本、実測、写真撮り、図判作成。また報告書の原稿執筆を行う。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
山ノ神	盛岡市片丘 内田	畠	包蔵地	120,000	1,000	450	820	円 2,500,000

(事務局)

第1表 発掘調査経過表

遺跡名	月			主な遺構		主な遺物	
	10	11	12~3				
山ノ神	16 □	6 □	遺物整理 図面作成 原稿執筆	ロームマウンド	10	縦文中期上器 石器	
				小堅穴	41		
				集石	1		
				溝状遺構	1		

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

位置と地形（第1・2図）

山ノ神遺跡は塩尻市大字片丘南内田に所在し、塩尻市の東方に南北に延びる片丘丘陵上に位置する。

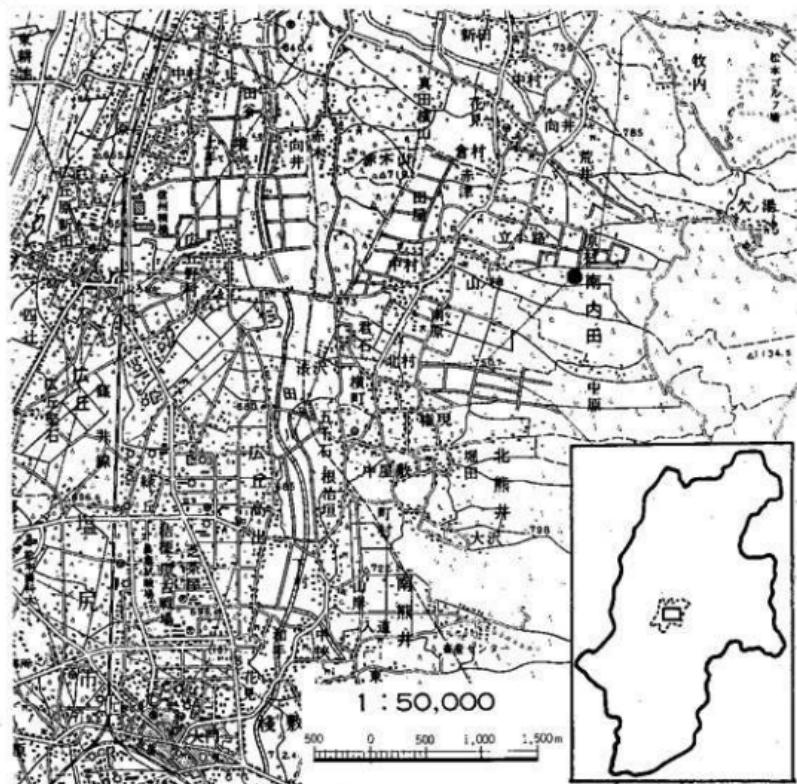
片丘丘陵は鉢伏山塊（鉢伏山、高ボッチ山、東山）の西麓斜面に沿って発達した丘陵で、洪積世中頃（約70万年前）に松本盆地南部で起こった南北性の断層運動によって生じた崖錐性堆積物を基盤とする。塩尻東地区の小坂田付近から松本市の寿付近まで2km前後の幅を維持して約10kmにわたって延びており、平均勾配は6°と相当急な斜面を西に向いている。丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。これらの諸河川はいずれも塩尻川に源を発し、丘陵直下を北流している田川にはほぼ直角に流れ込んでいる。

山ノ神遺跡が立地する丘陵は内田の塩沢川と北熊井の小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地の上にあり、現在、北側を中洞川に南側を南洞川によってそれぞれ深く開析されているため、ちょうどテラス状の緩斜面をなしている。両河流は塩沢川扇状地と小場ヶ沢川扇状地の縫合線上の凹地をほぼ直線上に流下しており、赤城山の丘陵に浸食谷（3~10m）を形成しながら田川へと注いでいる。現在の水量が少ないにもかかわらず浸食による開析地形は著しく、発掘地との比高は5~7mを測る。

地質

崖錐性堆積物はフォッサ・マグナ西縁の断層崖の形成時に産出されたもので、この付近の基盤である古生層および洪積世前期の塩礫累層を不整合に被覆し、層厚は約30m、盆地へ向って10°前後の傾斜をなしている。下部の片丘疊層は塩尻市長畠を模式地とし、上部の赤城山疊層は松本市寿赤城山を模式地としているが遺跡付近では共存している。両者は不整合関係を有しているが岩相が極めて類似しているため識別は困難で一括扱いされている。角礫～亜角礫層で淘汰は悪く、マトリックスは火山灰質シルトである。疊層は古生層起源の硬砂岩、粘板岩、珪質頁岩、新第三系の砂岩、凝灰岩、貫入の石英閃綠岩、第四系塩礫累層の安山岩など多種に富んでいるが、遺跡付近では石英閃綠岩、凝灰岩、砂岩の比率が目立つ。

これらの疊層の上位には火山灰起源のローム層が3m前後の層厚で被覆している。軽石を含む小坂田ロームと含まない褐色の波田ロームに大別され、両者は比較的整然と堆積しているが、本層最上部は河床や乱流の跡を残し水成の二次ロームであることを示唆している。

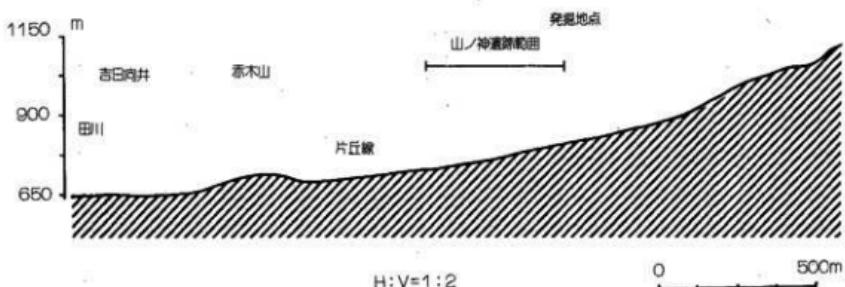


第1図 山ノ神遺跡位置図

層 序

ローム層最上部はかなり水の影響を受けており、ローム質粗粒砂土が厚く堆積する。淘汰が良好な分級作用が進んでいるところから扇状地堆積物と考えられ、おそらく中洞川、南洞川の浸食開析がまだ始まっていない頃の堆積物であろう。

礫混りロームは褐色を呈するシルト層で、かなり大きな(max20cm)亜円礫を混入する。発掘地区の北側と南側ではかなり様相を異にし、礫の混入度は北側で著しい。このことは当時、北西方向に傾斜していた扇状地面が南洞川の浸食復活にあたり、河流を北から南へ移動させたために、傾斜面を南西方向にかえたことを示唆している。ロームには軽石を混入させていないことから淡田ロームと考えられるが、風成(降灰)のものではなく水成の二次ロームであろう。



第2図 山ノ神遺跡付近の地形断面図

表土は黒褐色土と暗褐色土により構成され、層厚は南へいくにつれて厚くなる。付近は傾斜地であるため特に土壤浸食・再堆積が著しく、遺跡の土壤もこういった背後の山麓の浸食・風化などによって堆積した崩積土を起源としており、挙大の中疊を多く含む埴壌土である。

(鳥羽嘉彦)

第2節 周辺遺跡（第3図）

山ノ神遺跡は、筑摩山地東麓に展開する遺跡群のうちの1つである。周辺には多数の遺跡が発見され、あるいは発掘調査されている。以下、片丘地区および松本市内田、小赤地区に所在する遺跡を概観したい。

先土器時代では、小丸山で尖頭器が、赤木山で尖頭器、有舌尖頭器が出土し、また2kmほど西方の田川左岸段丘上に立地する高出遺跡群中の丘中学校遺跡でナイフ形石器、尖頭器、彫刻器、搔器、石刃、敲石などが、北ノ原ではナイフ形石器、尖頭器、有舌尖頭器がそれぞれ得られている。

縄文時代早期では、舟沢川の右岸に立地し、押型文土器、特殊磨石、ドングリおよび焼土が検出された五斗林、この五斗林の下方にある釧迫堂でも押型文が出土している。南熊井竈神でも押型文が採集されている。前期に入ると中原、舅屋敷、粗原、竹ノ花、小丸山、八幡原、大林、富士塚、女夫山ノ神、白樺など多くの遺跡がある。中でも舅屋敷は7軒の住居址と多数の小豎穴・集石が検出され、神ノ木～諾磯C期まで継続して集落が営まれた大遺跡である。中期に入ると遺跡は急増する。発掘調査されたものでも南熊井山ノ神、中原、粗原、南内田小丸山、内田雨堀、小赤前田木下などがあげられる。それぞれ住居址が発見され、この頃の大集落がいたる所に存在していたことがうかがえる。後、晩期の遺跡は少ない。エリ穴、石行など数遺跡が知られる程度である。



1.山ノ神 2.南郷 3.五斗林 4.小丸山 5.内田原

第3図 山ノ神道路周辺遺跡分布図

弥生時代に入ると、遺跡分布の中心は田川流域に移行する。山麓地帯では、2軒の竪穴住居址が発見された大原のほかに、中原、横町、狐塚、久保在家などで遺物が採集されている。田川流域では北ノ原で住居址が発掘調査されているし、丘中学校、白樺では方形周溝墓が調査されている。赤木山、上林、裏ノ原、社宮寺、花見では少量の遺物が採集されている。

古墳時代では、白樺で住居址が発見され、平安時代では舅屋敷、内田原、小丸山で住居址が検出されている。舅屋敷では、焼失家屋2軒を含む6軒の住居址、内田原では18軒の住居がそれぞれ調査されている。この他にも矢口、久保社家、鍛冶屋敷、別当原、無量庵、二本木、波沢、境沢、中原、今泉、横町など縄文時代中期と同じ位遺跡が稠密となっている。

(小林康男)

第三章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要 (第4・5図)

山ノ神遺跡は、塙尻市片丘南内田にあり、高ポッチ山麓を流下する群小の小河川によって形成された台地上に位置する。遺跡は台地に沿って東西にのびる。その範囲で、今回の発掘調査は、道路用地がその東端を横切ることになり、遺跡の縁辺部を調査するかたちとなった。

調査の結果、ロームマウンド10基、小豊穴41基、集石1基、溝状遺構1基が検出され、遺物として、縄文中期末葉の曾利IV～V期、または、さらに時期の下る土器片、石器が出土し、いずれも量的には少ない。

ロームマウンドは、検出時にローム層に暗褐色土がドーナツ状に存在するのが認められ、その暗褐色土に囲まれたロームの下に暗褐色土が入り込み、地山からロームが浮いたかたちになっている。ロームマウンドからの遺物はほとんど見られない。また、性格付けはできない。

小豊穴は、S22とS36が注目される。S22は、覆土上層に縄文中期末葉の土器片、半完形品が集中して出土しており、今回調査の遺構でもっとも多くの遺物を包含していた。S36は、伏甕を伴う小豊穴であり、また伏甕に伴う半完形の土器2個体が見られ、その出土のし方は、この小豊穴の特殊な性格を示唆している。S36の西側には、集石が存在し、両者が共伴関係にあったかは定かでない。小豊穴は、調査範囲の東側に多く見られたため、さらに東側に集落址の存在が予想できる。

遺物は、土器の他、石器では、石錐1点、スクレイバー4点、凹石1点が出土した。

(三村 洋)

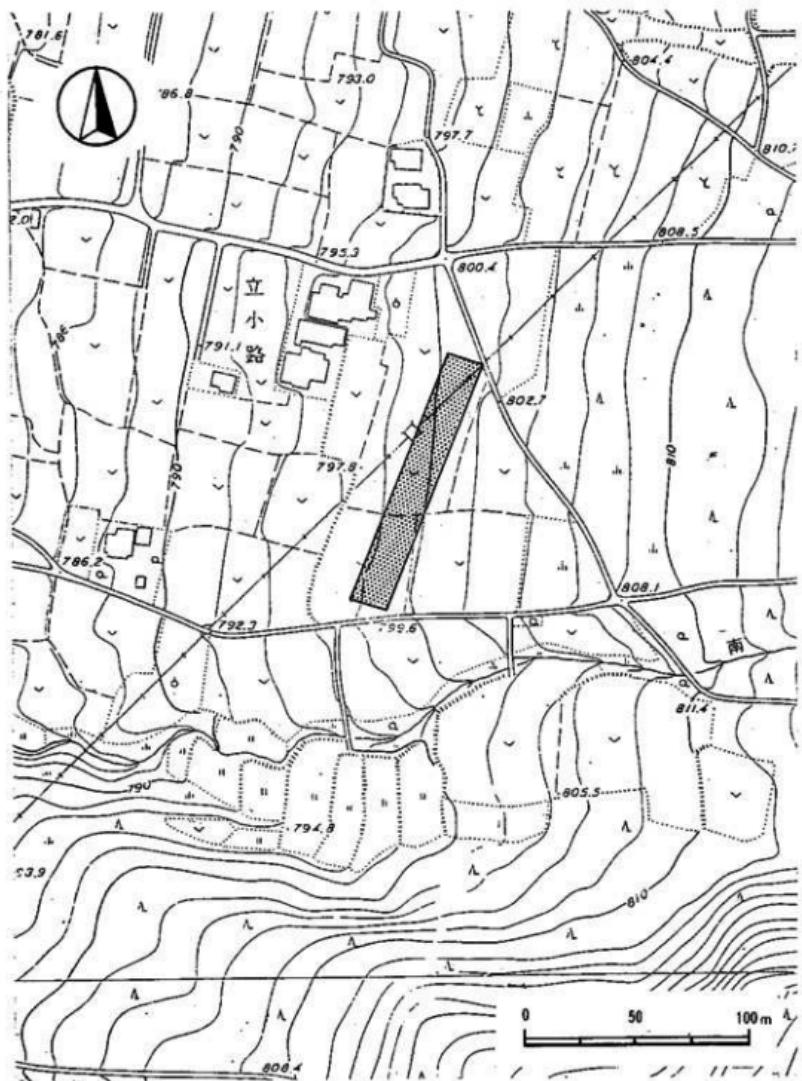
第2節 発掘区の設定

道路用地は片丘丘陵斜面に沿って東西に延びる山ノ神遺跡の最も標高が高い東端部を南北にかすめて横ぎっているため、遺跡の中心と考えられる場所からは200m以上離れている。従って調査にあたり当初は遺構の存在さえ疑問視される向きがあった。そこで発掘調査に先立ち、表土の堆積状態を把握するとともに遺構・遺物の保存状態を確認するために数ヶ所に試掘坑を掘削した。

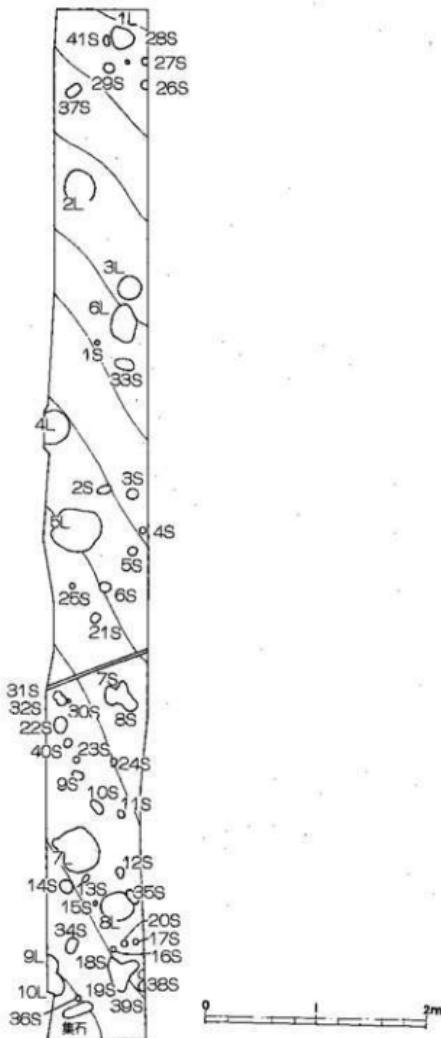
その結果、調査区全域にわたり約50cmの深さで褐色のローム層にあたった。北側は客土によりかなりの擾乱がみられ、また特に下層では礫の混入が著しく保存状態の悪さが推察されたが、これに対して南側では自然堆積の暗褐色土の保存が良く遺構の可能性を示唆した。

調査はバックホーによる表土除去を行なったのち、グリッド設定をした。グリッドは道路中心クイに沿って5m間隔でA～Tの20本のクイを設定し、さらにそれを基準に直角にふり4m間隔のクイを設けた。発掘区総面積は820m²である。

(鳥羽嘉彦)



第4図 山ノ神遺跡調査地区図 1:2500



第5図 山ノ神道跡造構全体図

第Ⅳ章 遺構

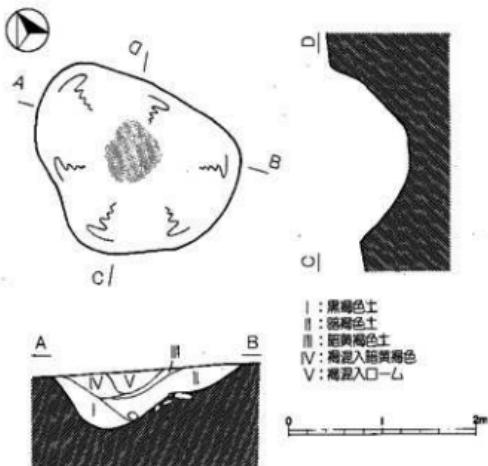
第1節 ロームマウンド

(1) 第1号ロームマウンド(第6図)

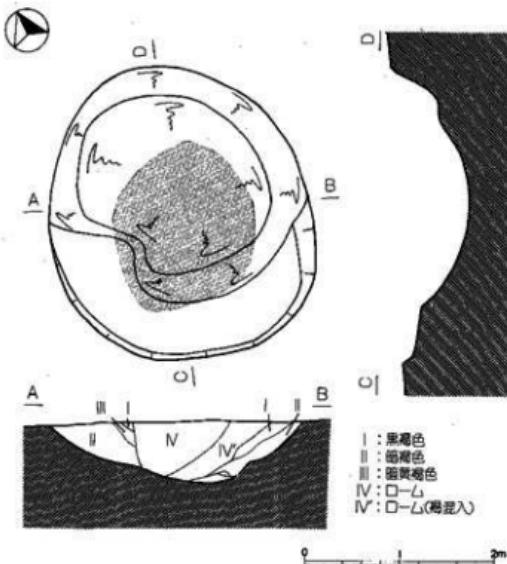
調査区最北端に存在するロームマウンドである。西側に隣接するようにして41Sが存在し、南方にも、やや距離をおいて、27S~29Sの3基の小竪穴が存在する。検出面において暗褐色のドーナツ状の落ち込みが確認され、環状を呈する溝とも思われたが、ロームマウンドの可能性もあるため、まず東西方向に試掘溝を掘り、ロームマウンドであることを確認した後、南側半分を掘り下げ、最終的には、クライ状を呈する竪穴を完掘した。

このロームマウンドは、長径227cm、短径187cmの規模を有する楕円形を呈した竪穴内に、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土が堆積し、最上部に最大幅53cm、最大厚25cmを計るローム塊が堆積する形で存在した。再堆積ロームは地山には続かず、掘り込みの中心に、宙に浮いて存在しており、多量の礫を混入するが、地山のローム層自体、多量の礫を混じておらず、基本的には、地山ローム層と同様なロームだと言える。再堆積ロームの範囲は、一部掘り過ぎの為、明確な広がりを示すことが出来ないが、それほど大きな規模では無く、風倒木的な色彩は薄い。しかし、遺物は全くみられず、特別人為的な様相も示しておらず、性格については判然としない。

(前田清彦)



第6図 第1号ロームマウンド



第7図 第2号ロームマウンド

(2) 第2号ロームマウンド (第7図)

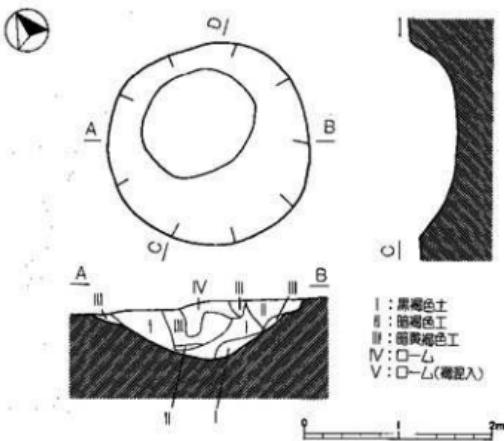
調査経過 D-2 グリッドに位置する。遺構検出中ローム面に黒褐色および暗褐色の落ち込みが中央にローム土をとり巻くようにして円形にめぐり、ロームマウンドと判断された。地層の観察、記録化のため南北にサブトレンチを設定し、掘り下げを行う。セクションの記録をとり、その後全掘する。

遺構 上部平面は南北310、東西275cmのやや随円形のプランで、落ち込みは2段となっている。壁は南壁で10cm前後のほど垂直となり、更に50cm前後のグラグラとした擂鉢状の落ち込みに続いている。底面は不整形で、起伏がみられる。覆土の堆積状態は、中央に上面で100cmのローム土が下部を地山に接続して存在し、この周囲を東側では礫を混入したローム土がとりまき、さらに上面で25cmの黒褐色土があり、最も外側には暗褐色土が東側で16cm、西で67cmの幅で底面(深さ66cm)までレンズ状に入り込んでいる。出土遺物はない。

(小林康男)

(3) 第3号ロームマウンド (第8図)

調査経過 F-2 グリッドに位置し、東に70cm隔てて第6号ロームマウンドが存在する。調査地域全体では、中央より北側(上方)にあり、ロームマウンドの分布からいえば、上位に位置する。



第8図 第3号ロームマウンド

遺構検出のための削平により中央部分のローム土を取り囲むようにして黒褐色ないし暗褐色がほゞ円形に分布する部分がみとめられ、ロームマウンドの存在が確認された。地層の状況を観察し、記録にとるため東西にサブトレンチを入れる。地層等の記録化終了後、全掘する。

遺構 プランは南北215、東西210cmのほゞ円形を呈する。確認面では南北200、東西240cmほどで黒褐色土の落ち込みがみられたため、掘り上がりとは若干ズレを生じている。土層は黒褐色土が深さ40cmまで三角堆土状に入り込み、この内側には暗黄褐色が中央部のローム土を包み込むような状態で堆積している。中央のローム土は厚さ12~35cmと均一性がない。掘り込みはグラグラとした壁で、深さ50cmを測る。擂鉢状である。底面は105×120cmの楕円形の部分がほゞ平滑となっている。

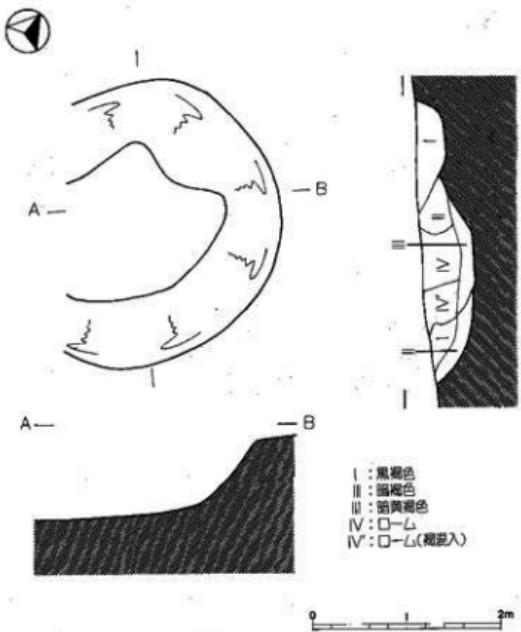
(小林康男)

(4) 第4号ロームマウンド(第9図)

調査経過 H-2、I-2グリッドで検出されたが、西側3分の1ほどは調査区域外のため未調査のままである。

遺構検出のための削平により、黒色土がローム土を取り囲むようにして落ち込んでいたためロームマウンドの存在が知られた。ロームマウンドの範囲、堆積状況を知るために南北にサブトレンチを設定し、掘り下げ、これにより地層の状態、規模を確認した後、全掘した。

遺構 プランは南北3.0m、東西もほゞ同規模と思われ、円形を呈すると推定される。確認面では南北2.8m、東西は調査区域内部分で2.5mの範囲に黒褐色の落ち込みがみられた。覆土の堆積



第9図 第4号ロームマウンド

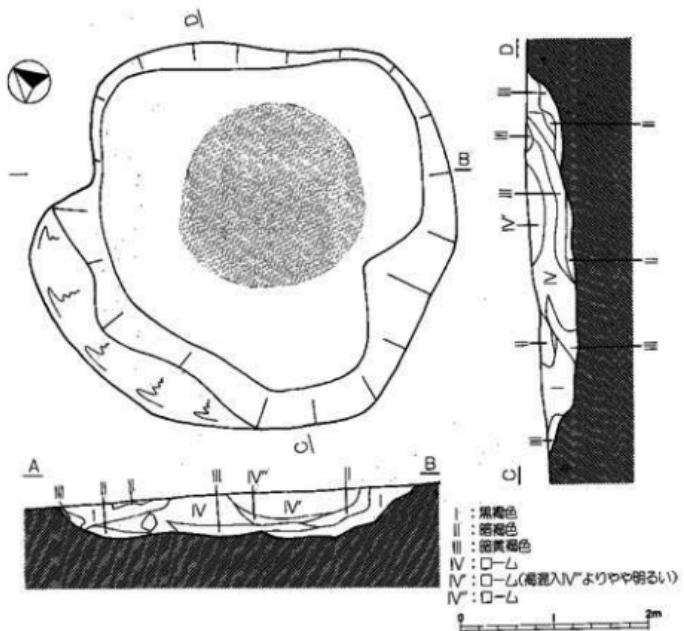
状態は中央部の再堆積したローム土（110cmほどの椭円形で厚さ40cm）をとり巻くようにして黒褐色土が40—120cmの幅で堆積し、部分的に暗褐色土が入り込んでいた。外縁の黒褐色土は30cmほどの厚みをもっていた。最下層には暗褐色土が15cmほどレンズ状に入り込んでいる。壁はグラグラとして起伏があり、底面も起伏がみられる。確認面より底面までの深さは65cmを測る。

出土遺物はない。

（小林康男）

（5）第5号ロームマウンド（第10図）

調査区のちょうど中央部に位置し、発掘作業初日に早くも確認された検出遺構第一号である。第II層の暗褐色土層を精査中ロームが露出したが、周囲に環状の黒褐色土が認められるところからロームマウンドの可能性が強くなり、全体を四分割し南北および東西のセクションを観察したところ、円盤状のローム塊の直下に黒褐色土および暗褐色土の入り込みがみられ、ロームマウンドと認定された。



第10図 第5号ロームマウンド

プランは北西隅が僅かに内側へ突出しているかほぼ円形を呈する。規模は直径4.4mと検出された10基のロームマウンドのうち最大級を示すが、深さは50cmにすぎず扁平の円盤状を呈する。中央部のローム塊は、長径2.0m、短径1.9m、厚さ35cmで上面は僅かに盛り上がる。また底部は南西隅で幅50cmの茎をもって地山に続いており、きのこ状の形状を呈している。ロームは中央部にやや礫の混入が多いロームがあり、成因的に二段階の過程を踏んでいるものと推察される。

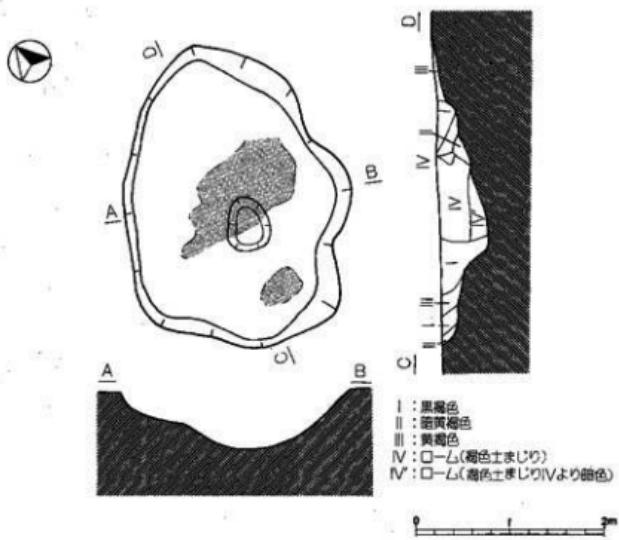
黒褐色覆土中より縄文時代土器片、石器を出土している。

(鳥羽嘉彦)

(6) 第6号ロームマウンド(第11図)

第3号ロームマウンドの南西側1m程の場所に位置するロームマウンドである。また、西側には、やや離れて1S、33Sが存在する。確認面において、暗褐色の落ち込み内部に、2ヶ所のローム面が検出された為、ロームマウンドと判断した。

長径325cm、短径240cmを計る隋円形の竪穴内に、マウンドは有さないか、2ヶ所のローム堆積部がみられた。中央に存在するローム堆積部は、主軸方向N-80°-E、長径160cm短径70cmの隋円形を呈し、純粹なローム堆積部の下層にやや黒褐色土を混じえたローム層が存在することによって、地山のローム層と区別される。また、南方に存在する小規模なローム堆積は、長径45cm、短径30cmを計り、セクションに見られるように、地山のローム層にまで達しており、地山との境は



第11図 第6号ロームマウンド

明瞭には見えられなかった。やや複雑な起伏を有しながらも、およそタライ状を呈する竪穴内には、このような再堆積ロームを始め、黒褐色土、暗褐色土などが、複雑な堆積状況を示している。自然堆積とはまず考えられず、人為的な痕跡が無く、中心部が特に一段深く凹みを有していることなどからみて、風倒木的な色彩の強い遺構であるといえよう。

なお、ローム堆積部、及び竪穴内からの遺物の出土は全くみられなかった。

(前田清彦)

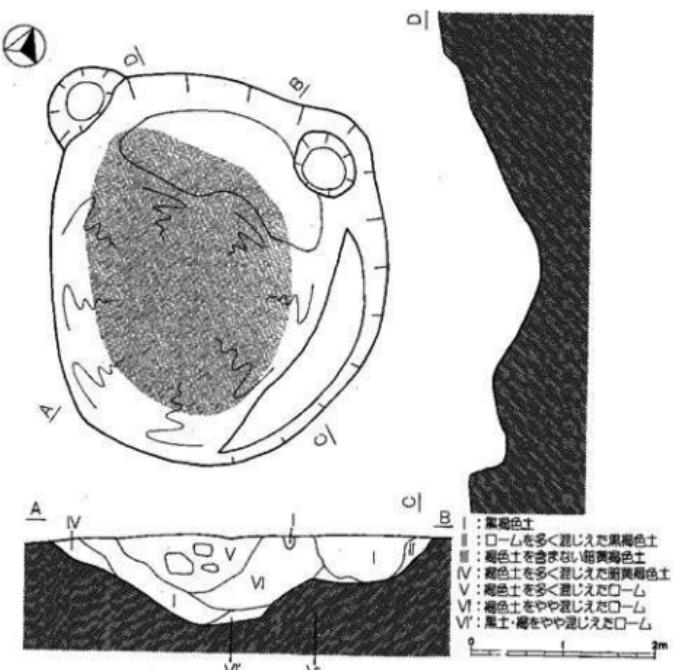
(7) 第7号ロームマウンド (第12図)

調査区南側の小竪穴群の中に位置しており、他のロームマウンドが中央より北側に分散しているのに対し、この第7号と第8～第10号の4基は距離にしてわずか10m以内に集まっている。

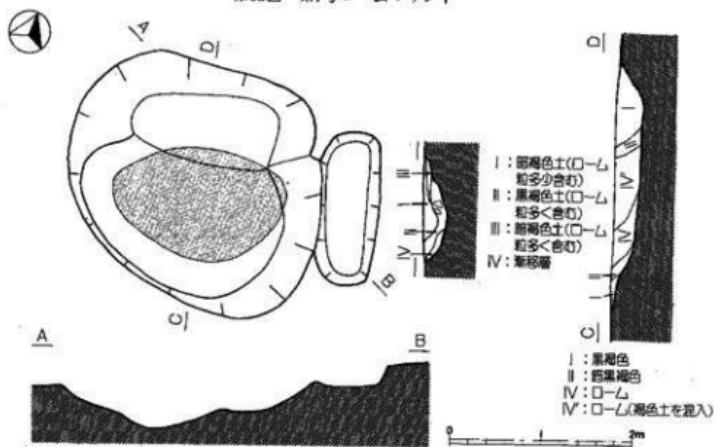
付近は第II層の暗褐色土層が比較的厚く、しかも擾乱がほとんど見られない保存良好な土層が残るが、その最下部においてローム塊が検出された。竪穴空間の中でローム塊の占有する割合が極端に大きく、周囲を巡る黒褐色土は、他のものに比して少ないので特徴的である。

規模は長軸4.4m、短軸3.4mの不整椭円形を呈し、長軸方向はN-40°-Wである。北側と北西側にやや抉りがみられるが、これはおそらく後世に構築された小竪穴によるものであろう。底部はなだらかに傾斜する擂鉢状で、最も深いところで1.1mの深さを測る。ローム塊は長径3.2m、短径2.2mで底部は北側へ流れながら地山へと続いている。

(鳥羽嘉彦)



第12図 第7号ロームマウンド



第13図 第8号ロームマウンド

(8) 第8号ロームマウンド（第13図）

調査経過 A-2グリッドにあり、第15号小竪穴および35号小竪穴と接し、また、110cm隔てた北側に第12号小竪穴が存する。今回の調査で発見されたロームマウンドの中で最も南に位置し、したがって最も低位置に所在する。

遺構検出中、黒褐色土、暗褐色土の落ち込みが半月状に認められたが、その範囲がはっきりせず、当初小竪穴ではないかと考えられた。しかし、再度、確認のための削平を行ったところ、北側にも同様の黒褐色土の落ち込みが検出されたため、ロームマウンドと判明した。

遺構 プランは東西175、南北250cmの不整形な隋円形を呈する。覆土は、礫を多く混入したロームおよびやや褐色を呈するローム土を取り囲むようにして黒褐色土がドーナツ状に堆積している。外側の黒褐色土上面の幅は60~100cmをはかる。中央部の礫を多く混入したロームおよび褐色をおびたローム土は底面までつづき、そのまま、地山に移行している。掘り込みは東側で浅く段がつく擂鉢状で、起伏が著しく、底面も同様に凹凸が激しい。

遺物の出土はない。

（小林康男）

(9) 第9号ロームマウンド（第14図）

第9号ロームマウンドは、調査区の南側に存在し、西側半分は調査地区外のため未調査であり、南側では、第10号ロームマウンドに、わずかに切られて存在する。検出時に、黒褐色を呈する落ち込み内部に、わずかに盛り上がりをみせたロームのマウンドの存在が確認されたので、ロームマウンドと判断し、まずマウンド部から掘り下げ、次に黒褐色土を掘り下げた。第10号ロームマウンドとの切り合いは、検出時には見えられなかつたが、完掘後、セクションに現れた堆積状況から判断し、9L→10Lであることを確認した。

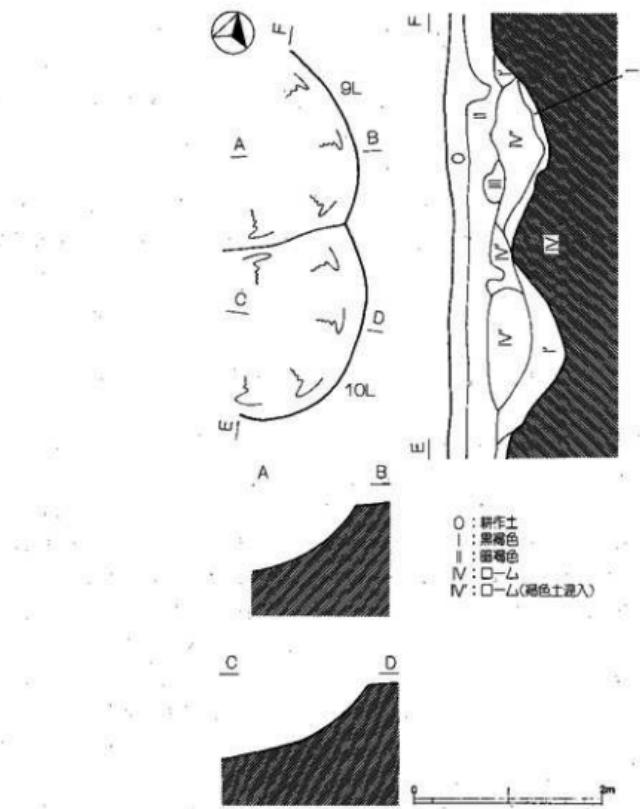
本ロームマウンドは、簡単な堆積状況を呈しており、ロームを掘り四んだ竪穴内に、薄い黒褐色土層が存在し、その上に、厚い再堆積ロームが乗っている。西側半分が未掘であるため、規模については判然としないが、竪穴は隋円形を呈すると思われ、確認される限りでは竪穴の長径220cm、再堆積ロームの長径150cmを計る。再堆積ローム内には多量の礫を含むが、地山のローム層も、かなりの量の礫を含むので、ほぼ同じロームであると推察される。

なお、本ロームマウンドは、マウンド最上部が現地表下50cmを計る深さに存在しており、縄文中期の遺構面、及び、包含層のつながりからみれば、中期の面とほぼ同じ面に存在しており、人為的なものとすれば、縄文中期の遺構と比定できるであろう。しかし、遺物の出土は、全くみられない。

（前田清彦）

(10) 第10号ロームマウンド（第14図）

第10号ロームマウンドは、第9号ロームマウンドの南に、9号をわずかに切って存在する。また、西側半分は、9号と同様に、調査地区外である為未調査である。調査経過としては、検出時に、黒褐色を呈する落ち込み内部に、わずかな盛り上がりをみせるロームのマウンド部が存在したのは9号と同様である。しかし、10号においては、マウンド部、及び、黒褐色土中にも、すで



に検出面において、多量の礫（こぶし大～人頭大）が存在したのは特徴的であった。完掘後、竪穴底面のローム層を観察したが、特別大量な礫の混入は認められず、竪穴覆土内の礫は、人為的な色彩が強い。

本ロームマウンドも、9号と同様、簡単な堆積状況を呈しており、ロームをすり鉢状に掘り回めた竪穴内に、多量の礫を含んだ薄い黒褐色土層が存在し、さらにその上に、大量の礫を混入する厚い再堆積ロームが乗っている。なお、この再堆積ロームは、北側では第9号ロームマウンドにまで延びており、9号を切って存在する。竪穴は、円形、もしくは階円形を呈すると思われ、確認できる範囲では、竪穴の長径230cm、再堆積ロームの長径190cmを計る。遺物は全くみられなかった。

(前田清彦)

第2節 小竪穴（第15～24図）

全部で41基が検出され、本遺跡の西方に多く分布し、NグリッドからPグリッドにかけてやや集中している。検出面は、ローム面の漸移層である。

形状は、平面形が円形または楕円形で、断面形は、タライ状、擂鉢状のものが多い。全体的に深さ20cm前後～40cm前後であり、特に深いのは、S6、S7、S22の各々、66cm、65cm、86cmである。遺物を包含する小竪穴は少なかったが、特に注目されるのは、S22とS36である。

S22は、平面形が楕円形、断面形がコップ状を呈し、覆土に多量の土器片を含んでいた。覆土は、3層に分けられ、土器片が集中して出土したのは、暗茶褐色土層の土層上部であった。土器片は、検出面より15cm前後掘り下げた暗茶褐色土層中に50cm程の厚さで、本小竪穴中央部に5cm～20cm大の礫とともに重なり合ったり、立った状態で出土した。また、この包含層には、炭化物も多少混入していた。

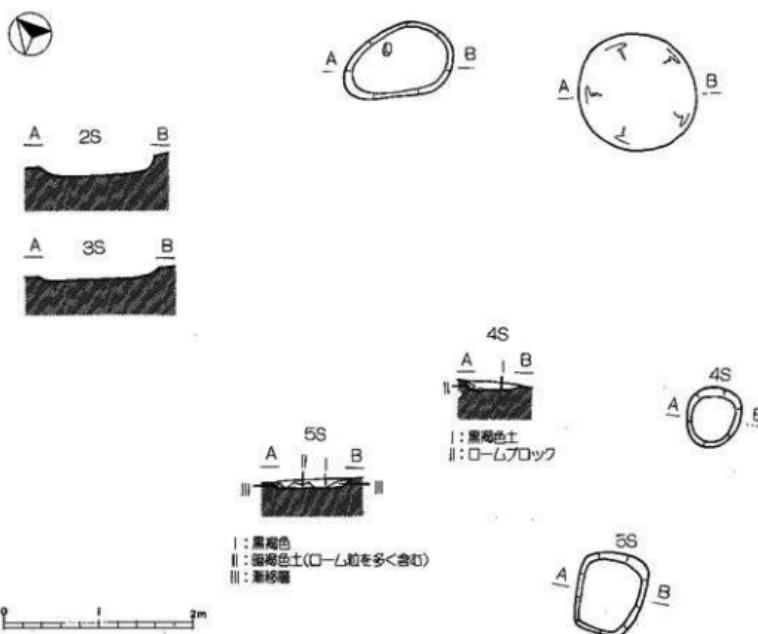
S36は、S-2グリッド、集石の東側に検出され、平面形が円形、断面形がタライ状、深さ26cmである。本小竪穴の西壁際の上部に伏せた状態の深鉢があり、さらに小竪穴底部に横わった深鉢が、逆位の深鉢の口縁部をその口縁で被せるように位置し、さらに小形の深鉢の破片が逆位の深鉢の東側口縁部をおおうように立位で重なり合っていた。逆位の深鉢の内部には、柔い暗茶褐色土で満たされていた。西側の集石との関係は定かではないが、特殊な出土状態の土器を伴う本小竪穴は、特別な性格を有すると思われる。S22、S36の伴出土器は、縄文中期曾利V期に相当する。

その他の小竪穴は、第2表を参照されたい。

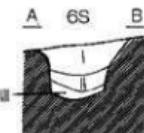
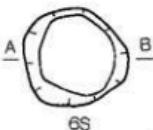
(三村 洋)



第15図 小型穴群(1)



第16図 小型穴群(2)

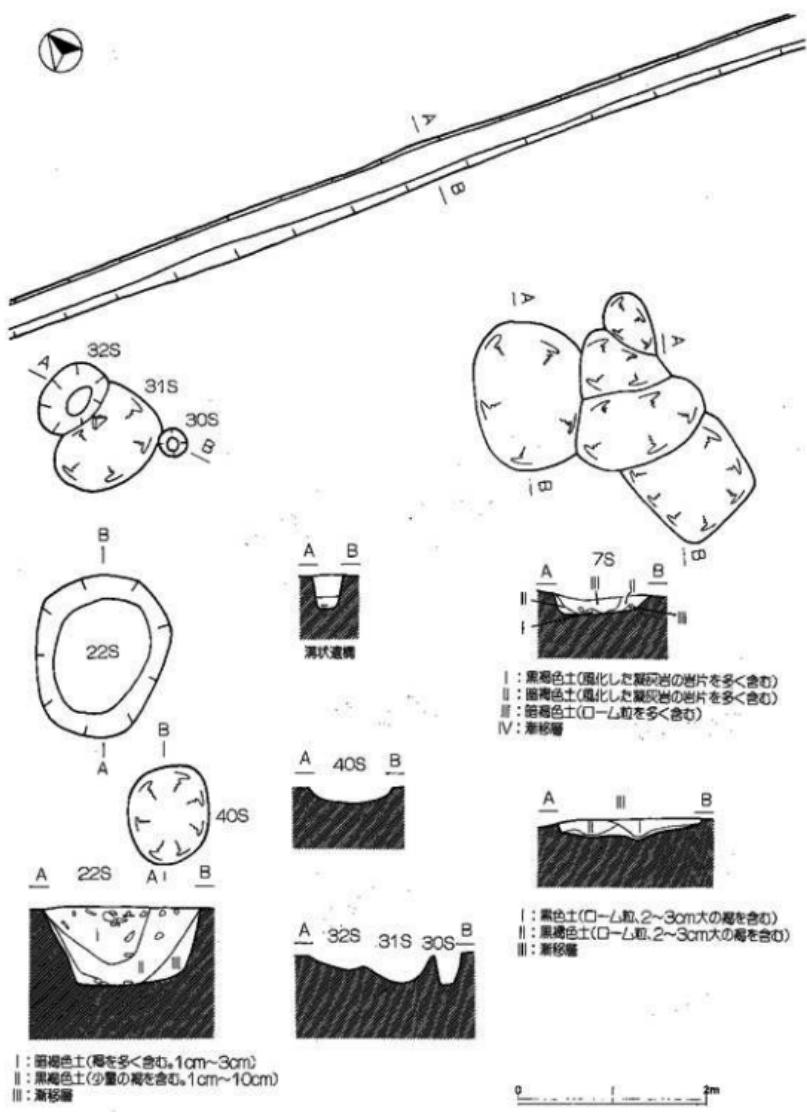


I : 黒褐色土(ローム粒、風化した凝灰岩の岩片を多く含む)
II : 黒褐色土(ロームブロックを多く含む)
III : 黒褐色土(ローム粒をわずかに含む)

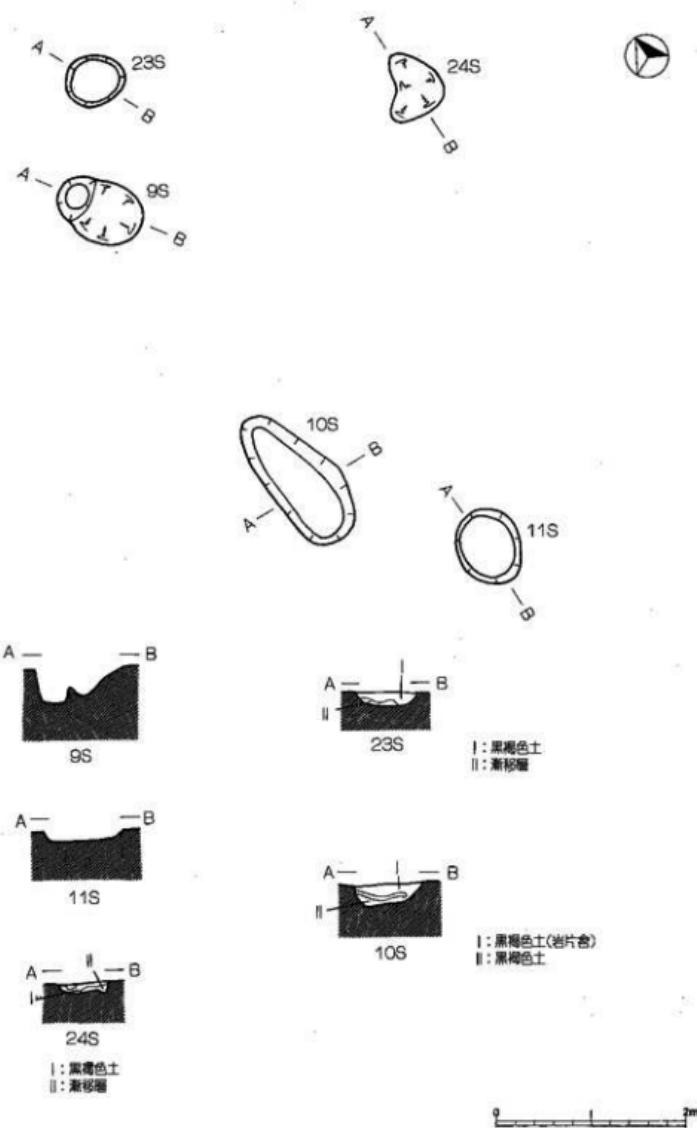
I : 黒褐色土(ローム粒、風化した凝灰岩の岩片を多く含む)
II : ロームブロック
III : 黒褐色土(ロームブロックを多く含む)
IV : 黒褐色土
V : 灰岩層



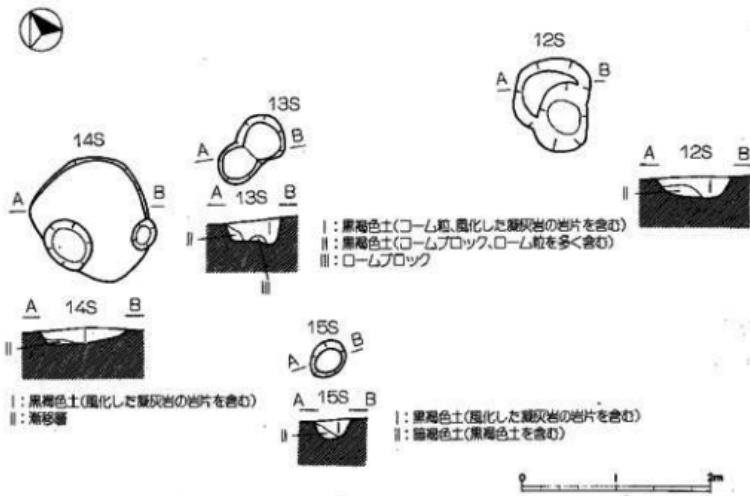
第17図 小豊大群(3)



第18図 小型穴群(4) 溝状遺構



第19圖 小型穴群(5)



第20図 小豎穴群(6)

第3節 集石 (第24図)

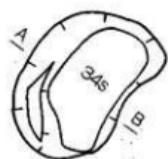
調査経過 本址は、S-2グリットに検出され、第36号小豎穴の東側に位置する。S-2グリットには、検出段階より暗褐色土層中に10~20cm大の礫が多く見られ、特に礫の集中している本址を集石とした。

遺構 数cmから25cm程の円礫や角礫が主軸方向N-52°Wにして、縦3m70cm、幅80cmの範囲に広がっている。礫は、両端部に濃密に集中している。東から西にかけて緩かに傾斜しており、比高差は40cm程である。礫は、集石下部の掘り込みの底面に達するものは少なく、底面と礫の間には、柔い黒褐色土に満たされている。礫には、火熱を受けた跡や使用痕の認められるものは無く、全て自然石である。また、集石の周辺には、同様な礫が散在している。

集石下部の落ち込みは、ロームを浅く掘り込んでおり、底部は、東から西にかけて緩かに傾斜し、途中でわずかにくぼんでいる。礫は、上部から底部まで分布しているが、このくぼみ付近は、上部に集中しており、底部には、わずかしか見られない。

本集石に伴う遺物は、細い土器片がごく少数見つかった。

(三村 洋)



A 34S B

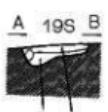
- I: 黒褐色土
- II: 茶褐色土(ローム混を多少含む)
- III: 斷続層



- I: 茶褐色土(径3cm~8cmの塊を多く含む)
- II: 黒褐色土(径3cm~8cmの塊を多く含む)

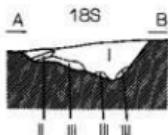
A 17S B

- I: 黑褐色土(風化した凝灰岩の岩片を多く含む)



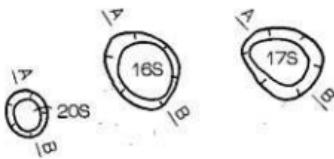
A 19S B

- I: 黒褐色土(風化した凝灰岩の岩片を含む)
- II: 茶褐色土(風化した凝灰岩の岩片を含む)



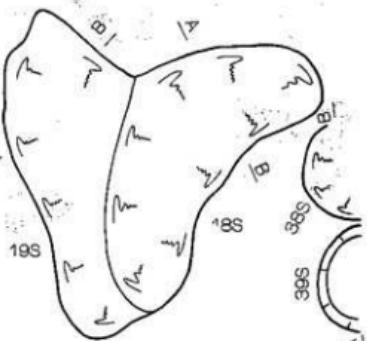
A 18S B

- I: 黒色土(風化した凝灰岩の岩片を多く含む)
- II: 茶褐色土
- III: 茶褐色土(ローム混り)



16S
B

17S
B

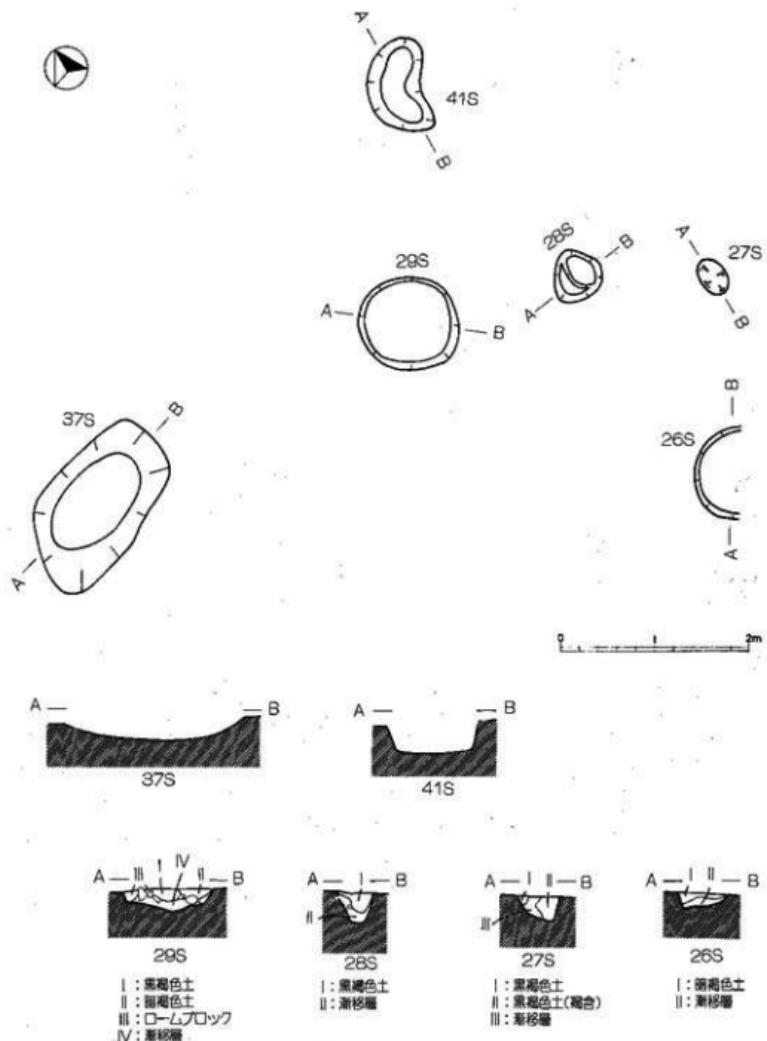


39S
A

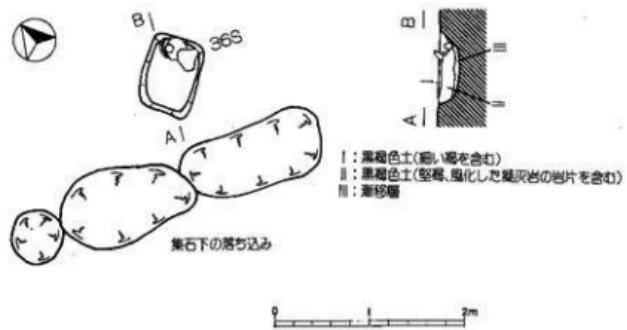
39S
A

3m

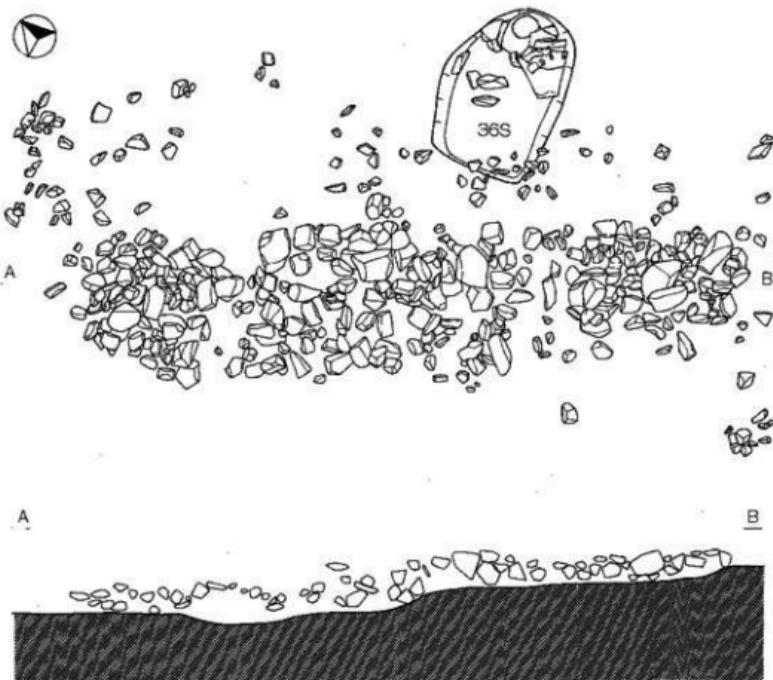
第21図 小型穴群(7)



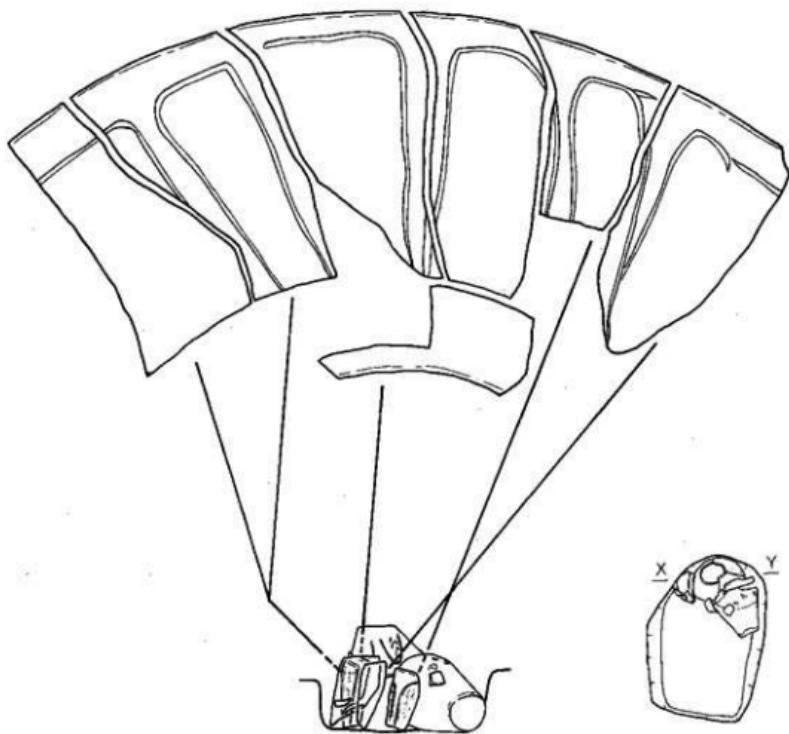
第22図 小竪穴群(8)



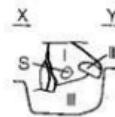
第23図 小竪穴群(9)



第24図 集石・第36号小竪穴



第26図 第36号小堅穴伏妻No.3出土状態



I : 錫褐色土(1cm毎の層をわざかに含む)
II : ロームブロック
III : 錫褐色土(ローム粒、酸化した變灰岩の岩片を多く含む)

第25図 第36号小堅穴伏妻出土状態図

第2表 小堅穴一覧表

No.	確認規格	平面圖	主軸方向	断面形	底面規格	底面	深さ	突出部の部位	時 期	備考
1	55×90	横 円	N-90°-E	二 段	26×17	丸 底	20	上		
2	121×78	*	N-90°-E	タライ状	105×65	平 傾	19	上		
3	126×124	円 形	—	—	—	—	10	上		
4	64×59	*	N-60° E	—	50×45	—	15	上		
5	88×72	横 円	N-53°-E	横 脈 状	75×55	—	19	上		壁上床のかたまり、歯先きの跡?
6	115×110	円 形	—	横 脈 状	90×80	—	66	上	経 過 C	
7	246×185	横 円	N S	タライ状	—	—	65	上		
8	113×92	長方形	N-52°-E	—	—	平傾(凸凹あり)	18	上		
9	95×63	横 円	N-50°-W	二 段	25×24	平傾(一部斜面)	34	上		
10	161×74	横 円	N-36°-W	横 脈 状	137×44	平 傾	28	上		
11	82×57	円 形	—	タライ状	65×55	—	9	上		
12	102×89	不整円 N S	—	—	74×59	平傾(やや斜面)	43	上		
13	84×50	長方形	N-55°-E	—	73×39	平 傾	30	上		
14	134×113	円 形	—	—	135×112	—	8	上		
15	43×35	*	—	横 脈 状	30×24	—	18	上		
16	90×75	横 円	N S	—	64×57	丸 底	35	上		
17	85×70	*	N-20°-W	タライ状	65×45	平 傾	17	上	管 利 V	
18	314×135	*	N-65°-E	横 脈 状	—	丸 底	40	上		
19	360×150	*	N-37°-E	二 段	—	—	23	上		
20	50×47	円 形	—	横 脈 状	33×26	—	22	上		
21	111×71	横 円	N-22°-E	タライ状	95×59	横 斜	24	上		
22	173×125	*	N-40°-E	コップ状	129×99	平 傾	85	上		
23	85×56	円 形	—	タライ状	50×48	—	15	上		
24	72×54	不整円	N-10°-W	—	—	平傾(凸凹あり)	13	上		
25	32×42	円 形	—	コップ状	29×24	平 傾	20	上		
26	100×30以上	半 円	N-30°-E	タライ状	88×44以上	横 斜	17	上		
27	49×27	横 円	N-3°-E	横 脈 状	—	—	46	上		
28	57×52	*	N-2°-W	コップ状	39×38	平 傾	40.5	上		
29	105×98	円 形	—	横 脈 状	92×64	横 斜	24	上		
30	30×29	*	—	コップ状	15×13	平 傾	41	上		
31	120×75	横 円	N-49°-E	横 脈 状	—	—	37	上		
32	88×58	*	N-53°-E	—	53×21	平 傾	23	上		
33	180×95	横 円	N-18°-W	—	60×42	やや丸底	44	上		
34	170×120	*	N-60°-E	—	137×63	横 斜	30	上		
35	153×44	*	N-4°-W	—	145×46	平 傾	27	上		
36	130×125	円 形	—	タライ状	107×98	—	26	上		
37	195×110	横 円	N-60°-E	横 脈 状	120×65	丸 底	26	上		
38	105×45以上	半 円	N-45°-W	—	—	—	41	上		
39	110×45以上	*	N-35°-E	タライ状	80×35	横 斜	21	上		
40	105×88	横 円	N-55°-E	横 脈 状	—	—	22	上		
41	200×57	*	N-19°-E	タライ状	80×30	平 傾	31	上		

第4節 溝状遺構(第18図)

調査地域の中央よりやや南側にあり、M-1、M-2グリッドの北側を斜めに横切っている。方向はN-65°-Wである。

ローム層直上の第II層(暗褐色土層)を精査中、調査区東縁部のM-1グリッドの北東クイの北脇で幅40cm、ほぼ平行に走る黒褐色土の落ち込みを確認する。プランに沿って落ち込みを追跡したところ、ほぼ直線状に調査区西縁部まで続いており、全体の一部分が調査区を横切っていることが判明した。

幅40~50cm、深さ36cmで覆土にはローム粒(max 2 cm)が多く混入する黒褐色土が充填している。横断面はU字形を呈し特に段は認められない。壁面は凹凸があるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。溝底もやはり凹凸が激しく、特に西側ほど顕著である。底部付近の覆土に特に異常はなく、砂など水流を示唆する痕跡も認められなかった。西縁付近で挙大の礫が床面から数個出土しているが、性格は不明である。

(鳥羽嘉彦)

第V章 遺物

第1節 土器

(1) 遺構出土土器 (25~29図)

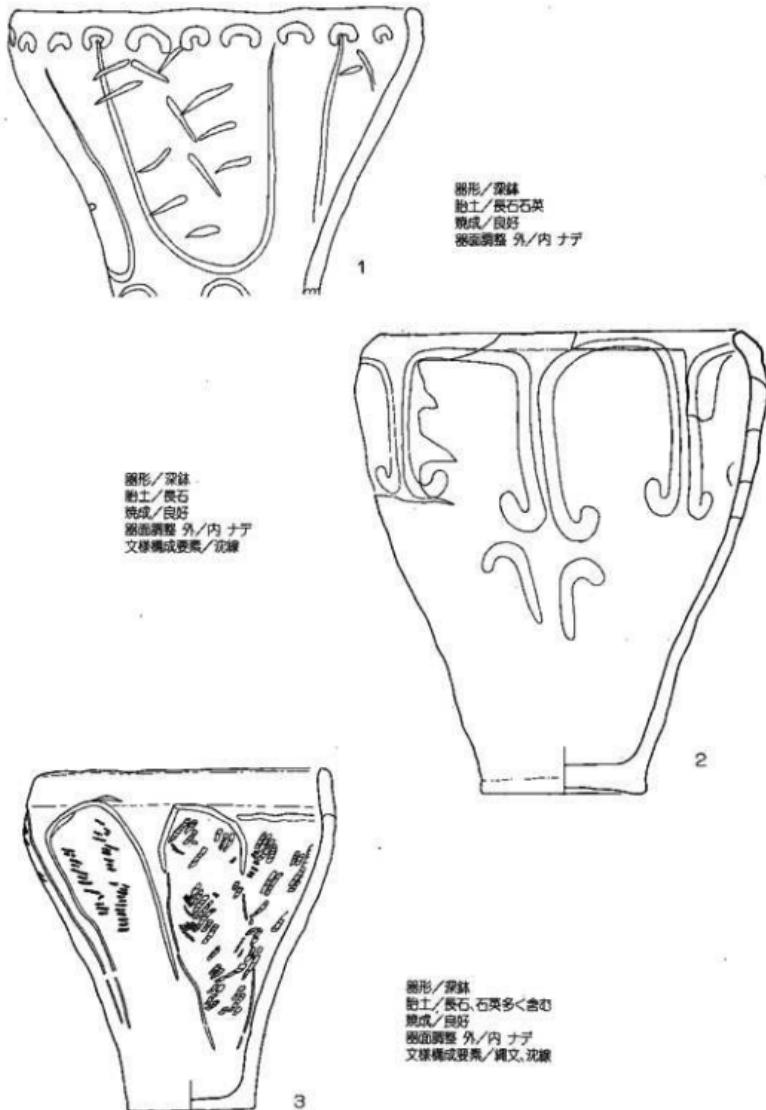
土器の出土した遺構は、第4、7号ロームマウンド、第6、19、17、22号小豎穴、そして構状遺構である。

第29図1は、第4号ロームマウンドの覆土に含まれ、外面には、植物茎の束と推定される施文具による条痕文が施され、縄文時代晩期～弥生時代初頭に属する土器と推測される。また、表採資料には、この時期に属する飛行機形石鎌があった。

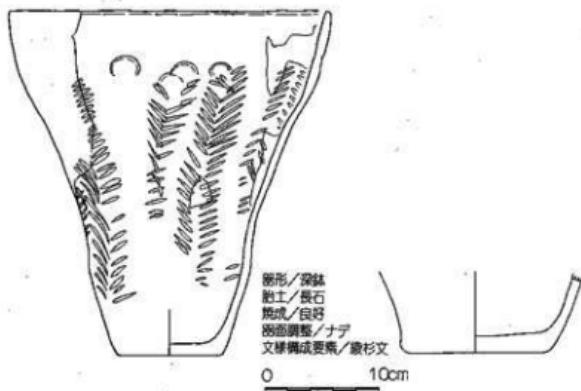
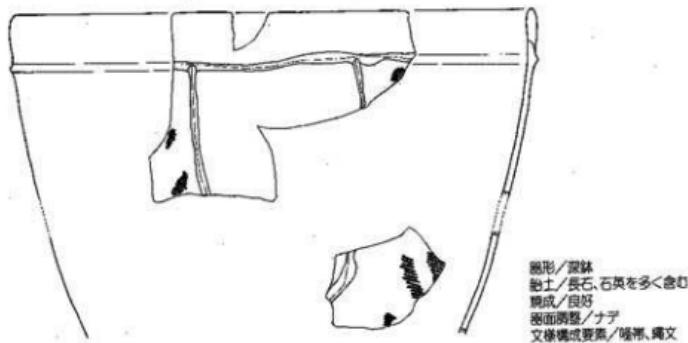
2、3は、第7号ロームマウンドから出土した。2は、磨消繩文、3は、口縁部破片で沈線が見られ、両方とも縄文中期末～後期に属すると思われる。4は、第6号小豎穴から出土し、数条の条線を地文にボタン状の粘土の貼付と刻目の突起が施されている。諸磯C式に比定される。

5、6は、第9号小豎穴出土。両方とも全面に原体Lの無節の繩文が施されている。7、8、9は、第16号小豎穴出土。7は、沈線と繩文、8は、綾杉文が施されている。9は、口縁部で横位に隆帯が配されている。10、11は、第17号小豎穴から出土した。10は、沈線と繩文、11は、短い沈線が斜位に施されている。12～15は、第22号小豎穴から出土した。綾杉文の12、14、繩文と沈線の施された13、15が見られる。第28図の1～3も第22号小豎穴のものである。1は、口縁部と胴部の破片である。推定口径46cmの深鉢で、暗茶褐色を呈する。原体LRの単節繩文が部分的に縱位に施され、また、口縁部に隆帯が施され、さらに隆帯が垂下している。2は、推定口径28cm、器高30cmの深鉢で現存は全体の3分の1ほどである。色調は、暗かつ色を呈し、文様は、綾杉文を主体的に胴下半部まで施され、口縁下部には、円形の浅いくぼみが横位に見られる。内面胴下半から底部にかけて全面的に煤が付着している。3は、深鉢の底部で、色調は暗茶褐色を呈する。

第27図、1～3は、第36号小豎穴から出土した。1は、小豎穴西壁上部に伏せた状態で出土した。口径29cm、現存器高21cmの底部を欠く深鉢で、暗茶褐色を呈する。内外面ともややあれている。文様構成は、口縁部に横位の半弧状のくぼみが配され、口縁下部から胴部にかけて、大きな半弧状の沈線が4単位配され、その沈線の内部にくずれた綾杉文が施されている。2は、小豎穴底部に横たわって出土した。推定口径27cm、器高32cmを計る深鉢で、現存は全体の3分の1ほどである。口縁から胴部にかけて太い沈線が施されている。3は、口径20cm、器高24cmの小形の深鉢で、伏棗の西側口縁部をその破片でおおうように重なって出土した(第25、26図)。茶褐色を呈し、結節繩文を地文にして、口縁下部から胴下半にかけて下に開く半弧状の沈線が5単位で施され、単位と単位の間は繩文が磨消されている。また、これらの文様の上にさらに単節繩文が斜位に施されている。



第27図 第36号小笠穴伏甕



第28図 第22号小竪穴出土土器

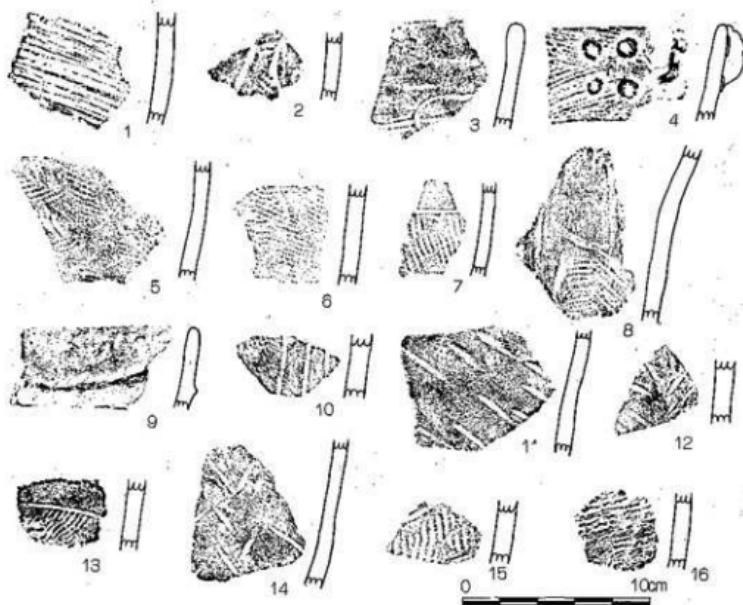
最後に16は、溝状遺構から出土し、燃糸文が施された胴部片である。

1、4を除くすべての土器は、縄文中期末に属する土器である。

(2) 遺構外出土土器 (第30、31図)

17は、縄文を地文に半裁竹管による沈線が施されている。18~26は、綾杉文と沈線を主体とする土器である。26は、口縁部片で、横位に沈線が施されている。27、28は、縄文を地文に沈線が施され、29~32は、磨消の縄文を特徴とする土器片である。33~35は、細い沈線が施され、33、35は、綾杉状に沈線が配されている。36は、溝巻文の沈線を特徴とする口縁部片であり、頭部にかけてくびれが強い。焼成の良い、堅緻な土器である。37~44は、無節の縄文が施された土器である。45、46は、縄文を主体に沈線が施され、47は、半裁竹管による沈線が施されている。

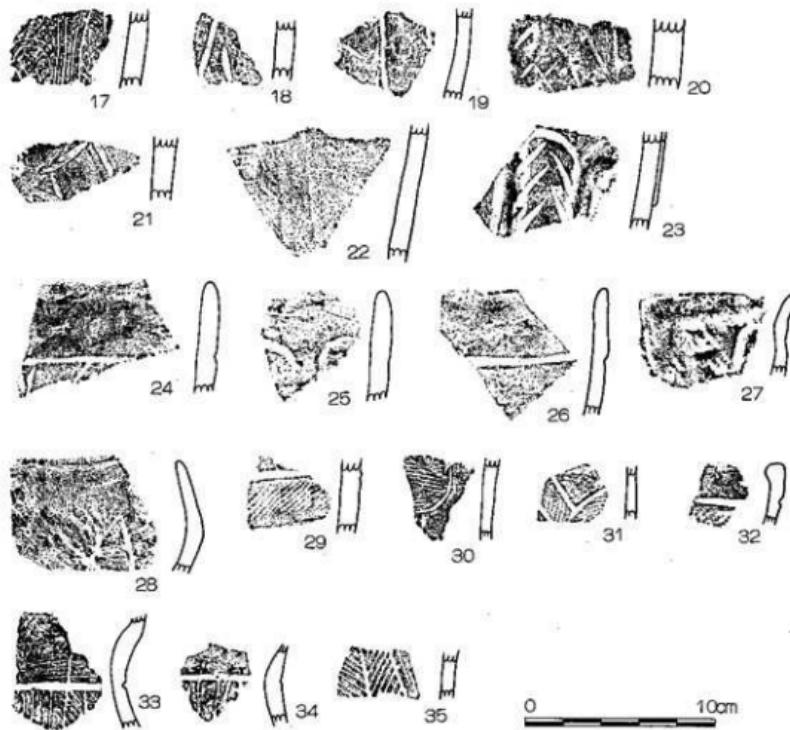
(三村 洋)



第29図 遺構内出土土器

土器観察表

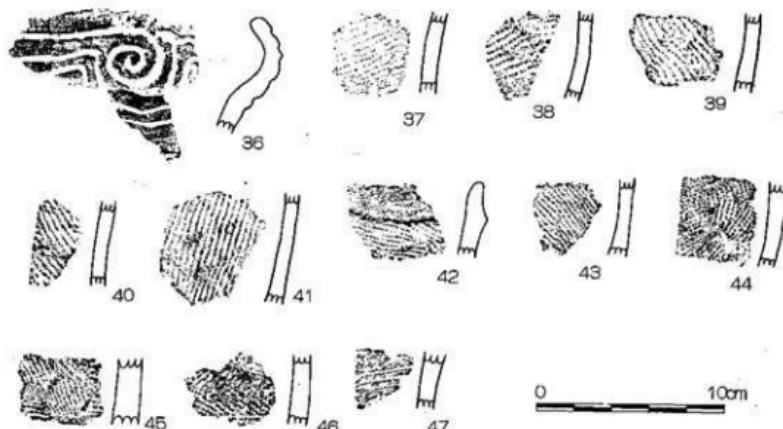
番号	発掘区	器形	部位	文様等成要素		器底形状	外周/内面	胎土	備考
				地文	目録				
1	4L	深盆	腹部	条文		ナ	テ	砂粒	
2	7L			感音葉文			+	+	
3	"		口縁	光面			+	+	
4	6S			波線、ボクン状突起			+	+	
5	9S		腹部	網文			+	+	
6	"			+			+	+	
7	16S			網文、波線			+	+	
8	"			網目文	波		+	+	
9	"		口縁	波			+	+	
10	17S		腹部	波線、圓文			+	+	
11	"			波線			+	+	
12	22S			網目文	波		+	+	
13	"			網文	波		+	+	
14	"			網目文	波		+	+	
15	"			網文	波		+	+	
16	浅灰直縁			網文			+	+	



第30図 遺構外出土土器(1)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様・構成要素	器形調整	外面/内面	施土		備考
							ナ	ア	
17	R 3	深鉢	部位	縦文、沈線					砂
18	N-3			横筋文					
19	S-2			沈線、横筋文					
20	Q-3			横筋文					
21	S-2			*					
22	N-2			横筋文					
23	S-2			凹窓、横筋文					
24	*		口縁	沈線					外側大又付着
25	*			*					
26	P-3		肩部	*					
27	S 2			縦文、沈線					
28	*			*					
29	O-3			*					
30	N-3			*					
31	O-3			唐括縞文					
32	S 2			縦文、沈線					
33	O-3		口縁	沈線					
34	*		側部	*					
35	*			*					
									同一箇所



第31図 遺構外出土土器(2)

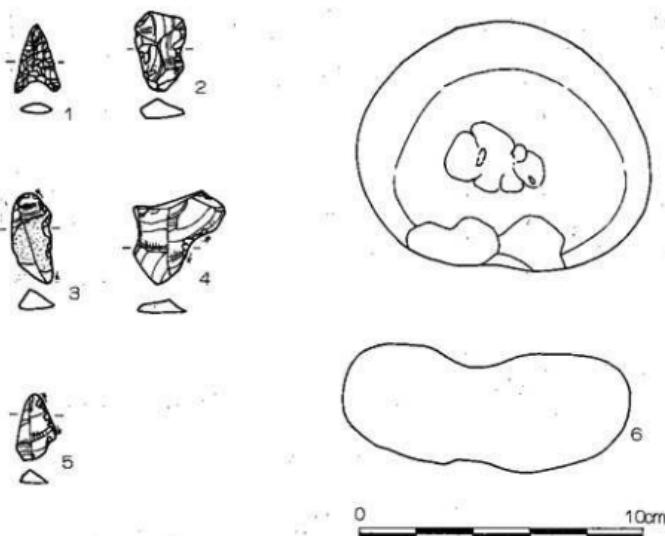
土器観察表									
番号	発掘区	器形	部位	文様成形法	器面質感	外面/内面	胎土	備考	
36	O-3	深鉢	口縁	模様	ミガキ/ナテ	ナテ	砂粒		
37	S-2	×	腹部	織文	ナテ	×	×		
38	O-3	×	×	×	×	×	×		
39	×	×	×	×	×	×	×		
40	×	×	×	×	×	×	×		
41	S-2	×	×	×	×	×	×		
42	×	×	口縁	×	×	×	×		
43	×	×	腹部	×	×	×	×		
44	×	×	×	×	×	×	×		
45	×	×	×	織文、模様	×	×	×	内面スス付有 外面 ×	
46	×	×	×	×	×	×	×		
47	×	×	×	模様	×	×	×		

第2節 石器(第32図)

発掘調査によって出土した石器は石鎌1、スクレイバー4、凹石1の計6点出土したのみである。

石鎌1は、茎部への抉り込みの浅いもので、平面形は二等辺三角形を呈する。完形品で、作りは精巧。スクレイバー2は、第1号小豎穴から出土し、3は第7号ロームマウンドからの出土、そして、5は第2号小豎穴から出土したものである。2は、凸凹の、3は外湾状、4は内湾状、5は直線状の刃部を有する。凹石は、表裏に各一孔を有する。

発掘によって得られた石器は以上のように極めて少量であった。発掘出土の石器は少なかったが、幸運にも、地元の横山実雄氏が昭和20年代からこの付近の遺物を採集保管しており、山ノ神遺跡のものも数多く含まれ、本遺跡出土の石器の様相をある程度知ることができた。



第32図 出土石器

石 器 観 察 表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	Q1	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.4	0.8g	
2	S1	スクレイバー	*	2.8	1.7	0.7	3.8g	
3	7号 ロームマウンド	*	*	2.2	1.4	0.8	3.0g	
4	Q3	*	*	3.3	3.2	0.5	6.0g	
5	S2	石斧	*	2.4	1.4	0.5	2.0g	
6				8.7	10.3	4.3	550g	

石鏃、石匙、石錐、尖頭器、磨製石斧、打製石斧、凹石がある。石鏃は、茎部への扶り込みが浅いものが目立ち、深いものは少量である。また有柄石鏃も4点ほど含まれており、これらの石鏃にはかなり時期差が存するものと考えられる。石匙は、2点あり、ともに横型で、作りは精巧である。石錐は柄のないものが1点得られている。尖頭器は、黒曜石製で、入念な加工が施されたもので、時期的に逆上する可能性が強い。磨製石斧は、乳棒状で刃部を欠くものが3点ある。打製石斧は、刃部が幅広の短冊形で、一般的なものである。この横山氏の採集品では、縄文中期遺跡にもかかわらず、打製石斧、凹石が少なく、石鏃が多い。発掘と異なり石鏃など黒曜石製品が目につき易いことは察することができるが、それにしても中期的な石器が少なすぎる。発掘においても打製石斧は全く見当らなかった。ロームマウンド、小窓穴（墓壙とも考えられる）、集石のみの遺構と中期的石器の欠如は、本遺跡の特徴、特異性として把えられるものと考えられよう。

（小林康男）

第VI章 調査と成果と課題

第1節 ロームマウンド(第3表)

山ノ神遺跡の調査においてはロームマウンドが10基検出されている。調査区が遺跡のはずれに設定されたにもかかわらず調査区のほぼ全域にわたり検出されたことからみて、その密度は大きく、また地区外にもかなり分布しているとみてよい。ロームマウンドはこれまでのところ自然のなせるもの、あるいは人為的なものなど諸説紛々であり、その性格はいまだ解明されていない。ここでは検出されたロームマウンドを検証する中で、若干、問題点を拾い上げていこうと思う。

名称

ロームを伴なう落ち込み(土壌)について、土井義行は椎子峯遺跡、(1984)で検出された34基のものについて覆土の状況から次の2つに大別している。A型: 再堆積ロームを有するもの。確認面において茶褐色土のドーナツ状の堆積がみられる。B型: 落ち込み底部に軟質のローム土が認められるもの。ここでA型としたものは從来、ロームマウンドを伴なう土壌と呼称されてきたものであり、またB型はローム面あるいは漸移層にまみられる「シミ状」の落ち込みを指している。本遺跡で検出されたものについては10基とも、ローム面で平面プランを確認した場合、基盤のロームと充填ロームとの間に黒褐色土がドーナツ状に入り込んでいる形をとっており、上記の分類によればA型に相当するものである。このA型のものについては「ロームマウンドを伴なう土壌」、「再堆積ロームを有する落ち込み」、「ローム盛土土壌」あるいは単に「ロームマウンド」とさまざまに呼称され統一されたものはないが、ここでは使用の適正はともかく、ほぼ通俗的に最も親しく使われている「ロームマウンド」を用いることにした。

第3表 山ノ神遺跡ロームマウンド一覧表(計測単位cm)

ローム ケン#	マウンド部			下部			マウンド部 長軸方向	土 層	備考
	長 軸	短 軸	高 さ	長 軸	短 軸	深 さ			
1 号	65	60	23	230	180	62	N-65°-E	マウンド部埋入ローム、茶褐色土と暗褐色土と暗褐色土が変遷に入り込む。	
2 号	178	148	64	321	264	71	N 55°-E	マウンド部のロームが中央部最高まで高く、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らむ。	遺跡2段
3 号	130	95	34	215	212	48	N-60°-E	マウンド部ローム、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らみ、暗褐色土が底部に入り込む。	
4 号	173<	107	79	310	235<	79	N-80°-E	マウンド部のローム、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らみ、暗褐色土が底部に入り込む。	
5 号	202	195	37	452	444	43	E-W	マウンド部のロームが中央部最高まで高く、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らむ、マウンド部頂は暗褐色土。	
6 号	155	70	30	325	240	50	N-80°-E	マウンド部のロームが中央部最高まで高く、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らむ。	
7 号	220	215	98	450	430	98	N-S	マウンド部のロームが中央部最高まで高く、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らむ。	
8 号	210	130	48	336	266	48	E-W	マウンド部のロームが中央部最高まで高く、黒褐色土と暗褐色土が周囲へ落らむ。	3号小堅穴を sondageしている 遺跡2段
9 号	250<	170<	55	445	380	60	—	マウンド埋入ローム、茶褐色土が底盤に入り込む	10号と繋り合 3号が新
10 号	260<	150<	45	450	390	70	—	マウンド埋入ローム、暗褐色土が底盤に入り込む。	

位置関係

10基のロームマウンドの位置関係を概観すると大きく2グループに分けられる。中央やや南寄りに横断する溝状遺構の付近を空白地帯として北側に6基、南側に4基である。東西に長く伸びる調査区の長辺90mのうち23mにも及ぶこの空白域は何らかの意味を有し、また残りの地域はその分、高密度を有しているものといってよいだろう。10基はほぼ直線状に横に配列しており東西に並ぶものはない。また第1号・第2号はそれぞれ単独の座状を示すが、第3号と第6号、第4号と第5号、第7号と第8号、第9号と第10号はそれぞれ対になっているかのごとく隣接した座状を呈しており興味深い。

土壤

平面形態は円形ないし梢円形を呈する。ロームマウンドは一般に不規則な平面形態をもつものが多く、本遺跡においても第1号・第3号・第6号・第8号は不整円形を呈するが、残りは必ずしもそうではなく、第2号・第5号・第7号などは比較的整った円形を呈している。規模は径2mから径4.5mのものまでさまざまあるが、ロームマウンドの平均的規模を径3m前後とするときして大型のものが多いということはいえよう。断面形態は第1号・第3号・第4号・第7号・第9号・第10号が擂鉢状、第5号・第6号・第8号がクライ状を呈する。第2号はクライ状の底部をさらに擂鉢状に掘り込んで2段底部となっている。深さは43cmから98cmまであるが、概して断面形態が擂鉢状のものに深いものが多い。

再堆積ローム

ここで取り扱う再堆積ロームとは土壤を充填し、しかも塊（マウンド）として捉えることができるロームであり、明らかに何らかの要因をもって撤入されたものを指す。従って水流もしくは地上りなどによって粒またはブロックとして充填堆積する「再堆積ローム」についてはこの範囲から除かれる。マウンド部は全基とも土壤のはば中央部に一塊あるものだけであり、片側に寄ったものや2個以上の塊はみられない。規模はまちまちであるが割合としては土壤直径の半分、即ち平面形態では面積比1:4のものが最も多く、土壤充填率の最も低いものが第1号、最も高いものが第7号である。断面形態としては中央部にレンズ状に浮くものと底部まで達しているものに大別され、前者には第1号・第3号・第4号・第9号・第10号が属し、後者には第2号・第5号・第6号・第7号・第8号が属する。

覆土

ドーナツ状に入る黒褐色土はさらに黒褐色土とそれよりやや明るい暗褐色土の2層に細分される。総じて暗褐色土は黒褐色土の内側にあるところから土壤は黒褐色土、暗褐色土、再堆積ロームの順に充填されたものとみられる。またマウンド部と底面の間に暗褐色土を挟むものがある。第3号・第4号・第5号である。充填順序としては暗褐色土の後にくる土層である。

性格

「ロームマウンド」については近年、報告例が増加しその性格について論じられてきている。それは大きく遺構説と非遺構説とに分けられ、前者の中にも墓壙とするもの、貯蔵穴とするもの、落し穴とするもの、産小屋とするものなどさまざまな考え方があり、見解は一致していない。また

後者の代表的なものとしては風倒木痕説があり、風向との関連性について検証したものも多い。御射山西遺跡、1981では検出された52基のロームマウンドについて、そのマウンド部が指す長軸方向と調査地方の平均的な風向との比較を行なっている。それによると長軸が指す方向と風向はほぼ直角となるものが多く、直接的な結論は出せないまでも何らかの因果関係があるとし、風倒木痕である可能性が強いものもあると指摘している。また居沢尾根遺跡、1981でも同様の検証がなされ、ここでは逆に検出された9基のロームマウンドのうち8基までが長軸と風向はほぼ同じ角度を示している。

本遺跡で検出されたロームマウンドについて、そのマウンド部の長軸方向を第33図に示す。これによると長軸方向のN-Sが1基、E-Wもしくはそれに近いものが6基あり残りは対角線方向あるいは不明のものである。一方、遺跡付近の平均的な風向は西向きの急斜面という立地環境により東方からの風が強く、しばしば突風が吹きつける。従って本遺跡のロームマウンドはその大半が風向とほぼ同じ方向を示しているといつてよい。しかしこれは検出された絶対数も少なく、偶然性も強いところから短絡的に風向との因果関係に結びつくものではない。本遺跡のロームマウンドにみられるそれぞれの特徴をもとに風倒木痕に対するいくつかの疑問点を拾ってみることにする。

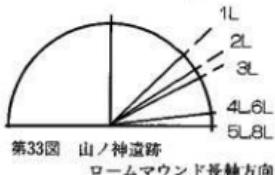
まず第1に土壌の平面形態が整いすぎていることである。風倒木の場合、たとえ根が四方へ均質に張り出していたとしても倒木の際の根痕は不整形を示すのが自然である。しかし本遺跡のものはそのほとんどが写真でも明瞭にわかるようにかなり整った円形ないしは橿円形を呈しており、プランの輪郭も鮮明である。

第2に断面形において、擂鉢状のものはともかくタライ状のものは自然現象での形成が考え難い。

第3にマウンド部が風倒木痕説でいうように倒木とともに持ち上げられた土が風雨や日照などによって落下し再堆積したものであれば、その間に流れ込んだ黒褐色土の中にも当然ロームが混入しているはずであるが、各断面図にも見られるように黒褐色土にはローム粒、あるいはロームブロックの混入は認められず、はっきりとした地層区分がされている。

さらに第4に第2号・第6号・第7号・第8号にみられる断面形であるが、マウンド部の上面が下面より大きく、しかもマウンド部が底部に達している。風倒木の場合、マウンド部の断面から推察すれば倒木の根から土塊が落ちる前にすでに根痕へ黒褐色土が流入堆積し、そこへ土塊が落ちた状態になるが、そのような場合、果してマウンド部が底部へ達するようなことが起こりうるだろうか。

以上のように風倒木痕への疑問が多々残される中で、反対に何らかの遺構である可能性も生じてはくる。しかし遺構内においてそれを支持する施設あるいは遺物を探し出すことができなかつた現段階においては、それらは推測の域を脱することはできない。今後この種の報告例が増えていく中で比較・検討を重ねていくことにより性格づけ也可能になってこよう。（島羽嘉彦）



第33図 山ノ神遺跡
ロームマウンド長軸方向

参考文献

- 土井義行他『椎子峯遺跡』横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡調査会 1984
能登 健「発掘調査と遺跡の考察」—いわゆる“性格不明の落ち込み”を中心として—(『信濃』
26-3) 1974
青沼博之他 中央道報告書『茅野市その4・富士見町その3』昭和51~53年度 1981.
〃 中央道報告書『原村その4』昭和51・52年度 1981

第2節 片丘の縄文遺跡(第34~42図)

片丘地区は縄文時代の遺跡の稠密地帯として著名な地域である。今まで7遺跡の発掘調査が実施されているが、その多くが高校のクラブ活動により行なわれたものであり、その結果は部内のクラブ誌として刊行されている。そのため研究者の目に解れないものが多い。そこで、ここに今まで調査によって得られた資料を整理して、その概要を報告し、当山ノ神遺跡をとりまく縄文時代遺跡の存り方を考えてみたい。

早朝 早期に属する遺跡で調査されたものは市内片丘地区ではなく、隣接する松本市内田の五斗林遺跡で実施されている。田川の一支流舟沢の右岸に当り、ケイト山の山麓にあり、標高は850mを示す。調査によって得られた遺構は、第1地点で、2個所に焼土があり、南側の焼土面よりわずか浮いて板状の自然石があり、周囲から橢円押型文とドングリが出土している。第4地点では、2個の自然石の周辺に焼土があり、山形押型文が伴出している。他に、田戸下層式なども出土している。松本市で調査された押型文期の遺跡では最も早い時期のものであったが、信州ローム2号に概要が発表され、郡誌にわずか触れられている程度である。

前期 男屋敷、中原、女夫山ノ神の3遺跡で調査されている。

男屋敷、市内片丘北熊井に所在し、山寺沢と権現沢にはさまれた舌状台地上に立地する。昭和39年に深志高校による発掘があり、また、昭和56年に市教育委員会の手による調査が実施された。最初の調査では、木島式期と思われる第1号住居、木島式あるいは関山式と推定された第2・3号住居址、諸磯期とされる第4号住居址の4軒の住居が発見され、他に火所といわれる集石が検出されたようである。出土遺物は、木島式、神ノ木式、有尾式、諸磯式が出土し、石鎌、石匙、石錐、磨製石器、滑石製品などである。市教委の調査では、神ノ木期1、有尾期2、諸磯a期2、諸磯b期1の計6軒の住居址が発見され、諸磯b期~十三菩提期にあたる小豊穴42、諸磯a期と考えられる集石が検出された。遺物では、2号住居から出土した神ノ木式、11号住居から出土した有尾式土器は一住居単位に把えられた例として貴重であり、有尾式に北白川下層I式および清水ノ上II式が共存し、該期土器編年対比に大きな役割を果した。このほか、石鎌、石匙、尖頭状石器を主体とする石器が多量に出土し、該期の典型的な石器組成を示している。

中原遺跡 市内片丘北熊井にあり、松葉沢と牛壳沢との中間にある舌状台地上に立地する。昭和50年の調査によって、住居址が1軒発見されている。報告がないためその詳細は全く不明であ

るが、長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その3（昭和54年刊行）によると、「縄文前期住居址（2号住）は、6.8m×5.0mの長方形プランで主柱穴4ヶがあり、中央には2ヶの石を含む焼土が径1mに亘って存在した。土器は関山式で側壁上から深鉢1点が出土している。」と述べられている。

女夫山ノ神遺跡 市内片丘北熊井にあり、牛壳沢に南面する台地上に立地する。深志高校により4回にわたり調査されている。検出された遺構で前期に帰属できるものは、II号住居址（前期初頭、中央に炉石）、III号住居址・IV号住居址（前期末、方形）、IV号住居址（前期末、方形）があり、住居形態を考えるうえで重要である。出土土器は、前期末～中期初頭の良好な資料である。

中期 南熊井山の神、北熊井中原、俎原、女夫山ノ神、南内田小丸山、そして今回の山ノ神である。

南熊井山ノ神遺跡 昭和32年、片丘村教育委員会によって発掘が行なわれた。2軒の住居址が検出され、第1号住居は未完掘であるが大形石圓炉で埋甕を2ヶ有する。第2号住居址は完掘され、東西5.18×南北4.98mで隅丸方形に近く、炉は石圓炉の石が抜去されたもので、4本柱、埋甕が西壁下に設置されている。1・2号ともに加曾利E式土器を主体的に出土し、打製石器、磨製石器、凹石、石皿、石棒、石鐵、垂飾品などが伴出している。松本市でも比較的早い時期の調査であり、片丘地区での学術的な調査はおそらくこの発掘が嚆矢となろう。

中原遺跡 片丘北熊井中原にあり、牛壳沢に南面する台地上にある。4軒の住居址が完掘され、1号住居は勝坂期、2～4号住居は加曾利E期に帰属する。2号住居は、円形プラン（5×5.42m）で、石圓炉、柱穴は2個1対で6本ある。1号址は、横円形プランで、埋甕炉、3号址は横円形プラン、4号址も横円形で、ともに中央に床座炉を設ける。

俎原遺跡 片丘北熊井俎原にあり、大沢川、牛壳沢にはさまれた台地上に立地する。8軒の住居址と小竪穴が発見されている。俎原遺跡の北側の一端が調査されたことになり、松本市では数少ない中期前半期の資料が多量に出土した。特に、平出III Aを含むIV号住居出土の一括資料は貴重である。

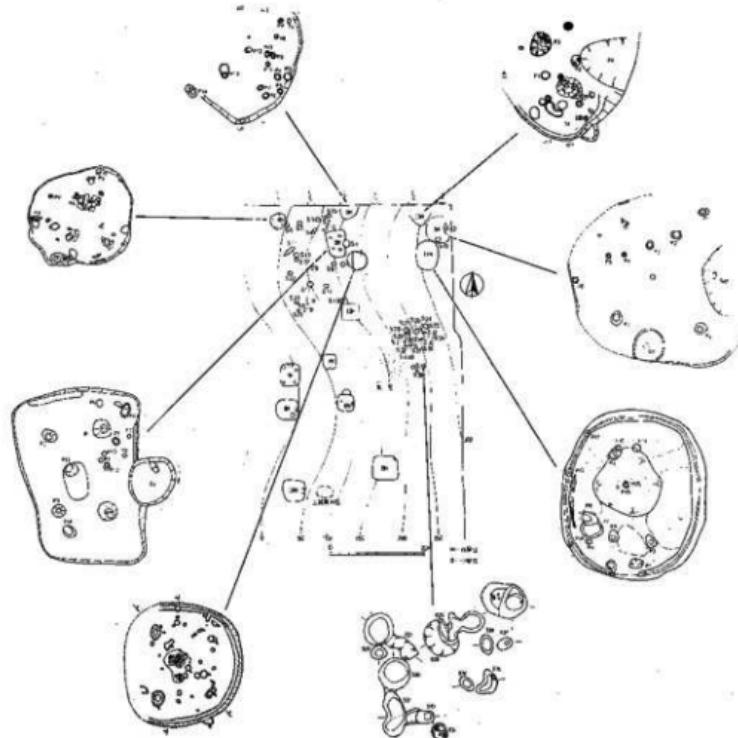
小丸山遺跡 片丘南内田にあり、南北両側が小河川により開析された舌状台地上に立地する。遺構は、標高760～780mの間に幅50mの帯状に分布し、勝坂期が4、5、6、14、17号の5軒加曾利E期が1～3、7、9～11、13、15号の9軒がある。6号住居では床面上45cmに土器が20cmの厚さで堆積し、吹上バターン現象が見えられた。7号址では、床面上10cmの褐色土層中の平石に横たわるように石棒状の河原石が重なり、更にその下に小さな棒状の石が1個重なっており、この上の石棒状河原石の末端に、首、石手、足を欠いた土偶が上を向いて、あたかも平石を台として安置されたかのように出土して注意された。また、南北1.8、東西1.1mの横円形で、深さ24cmの小竪穴が発見され、この南端に内部に伏せた2個の土器を内包する甕がやはり伏せた状態で検出された。今回の山ノ神での伏甕と極めて類似しており、注目される。

後、晚期 市内片丘ではこの時期の遺跡の調査はない。わずかに君石遺跡で大洞Aの土器が1片出土したのみである。

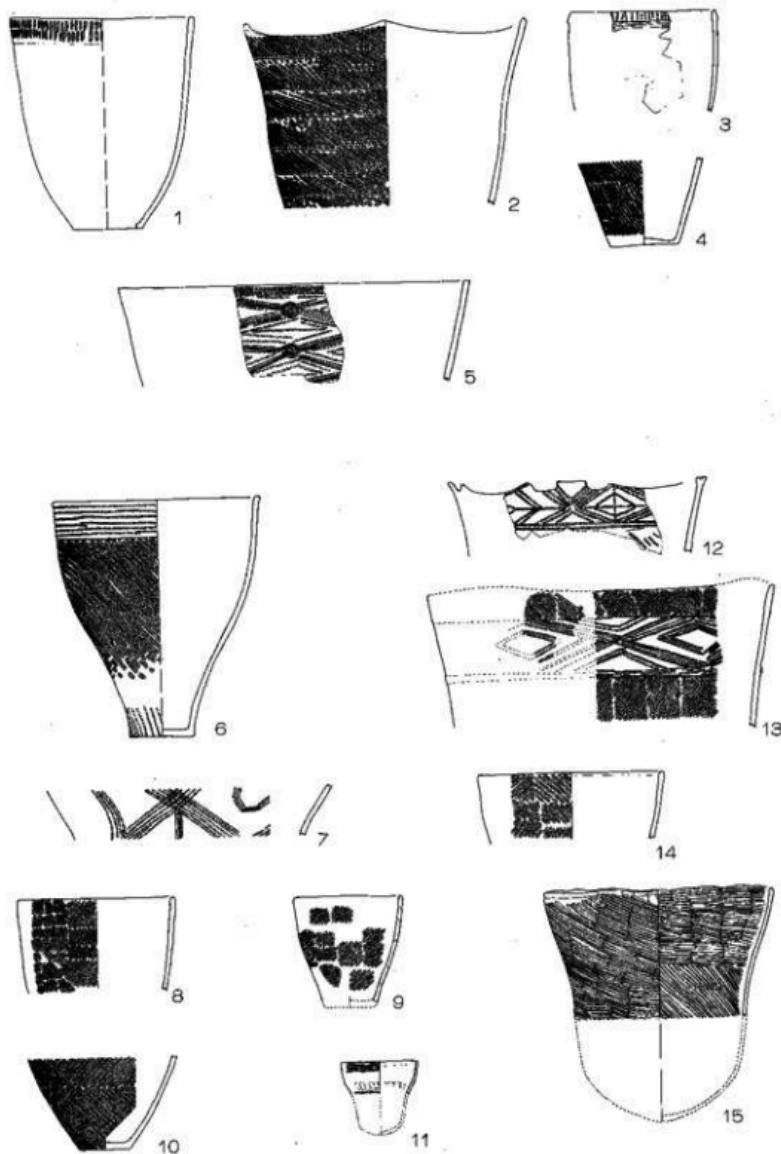
以上の各遺跡の概要は以下の文献に掲載されている。

（小林康男）

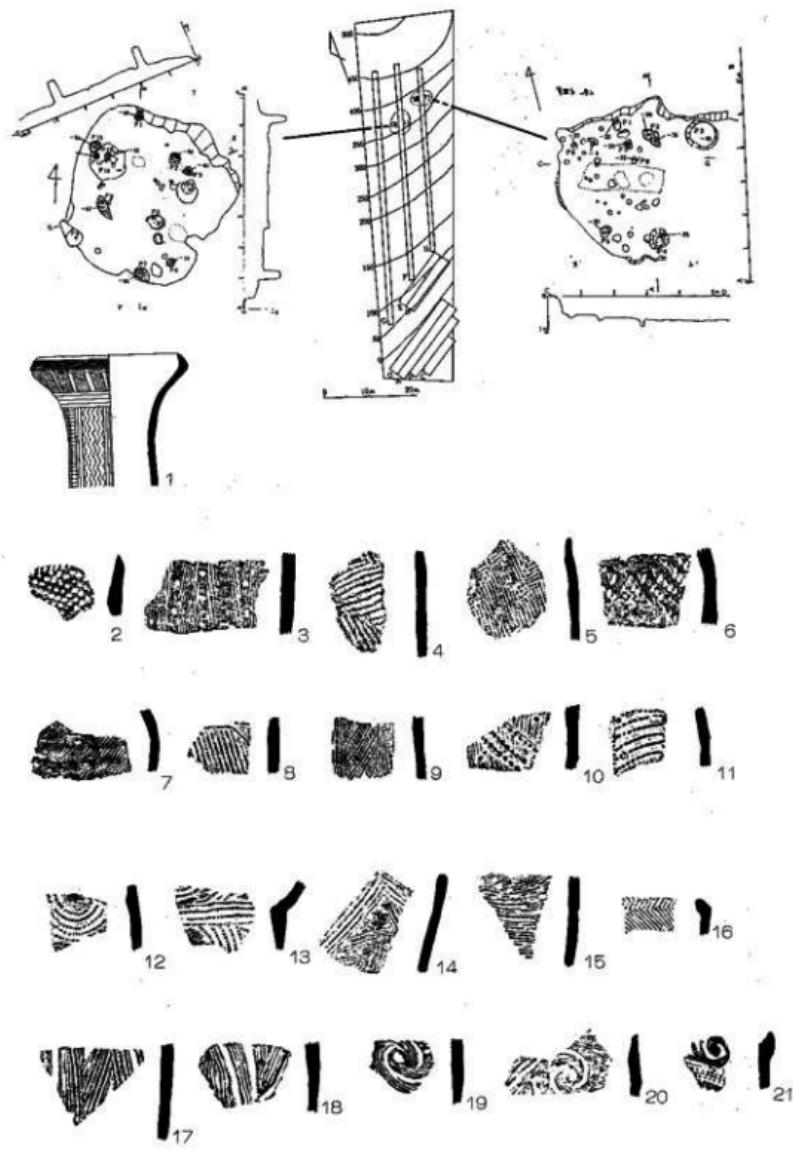
松本深志高校地盤部「男屋敷遺跡」(あせみち14、1964) 同「中原遺跡」(同15、1965)
同「女夫山ノ神遺跡発掘調査報告」(同27、1978) 同「粗原遺跡発掘調査報告」(同30、1981)
原嘉藤他「長野県塩尻市小丸山遺跡緊急発掘調査報告」(県考古学会誌8、1970)、塩尻市教委
「男屋敷」(1981)



第34図 男屋敷遺跡全体図



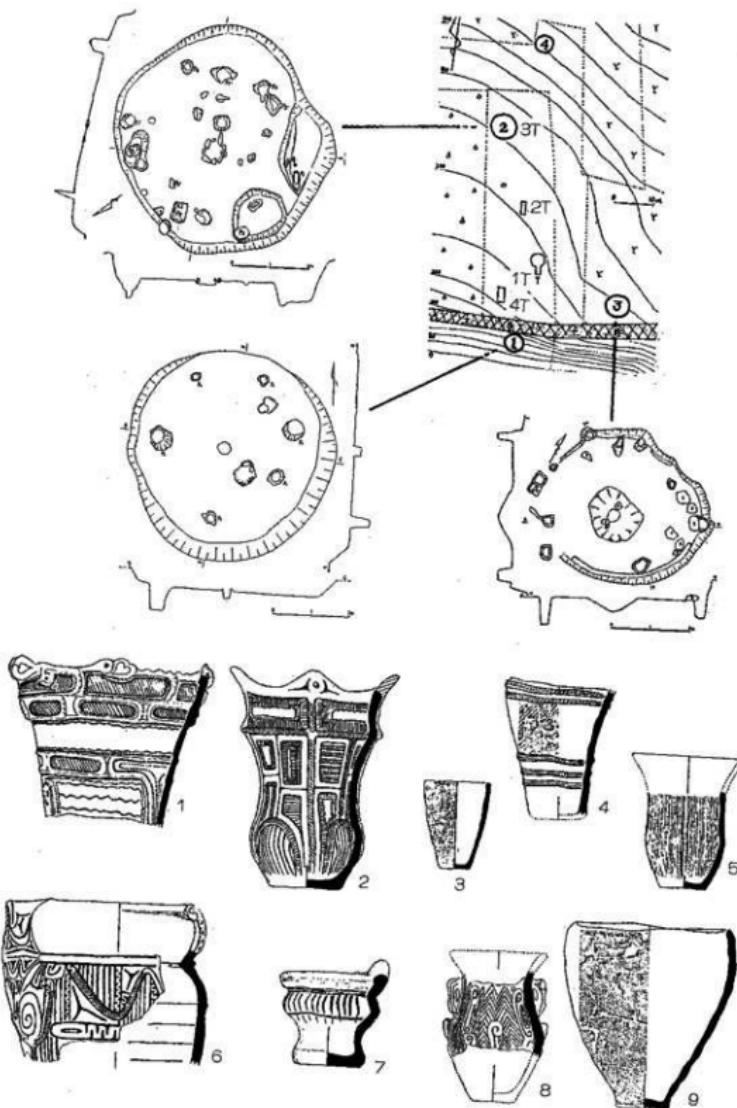
第35図 勇星敷遺跡出土土器 第2号住(1~5)第11号住(6~15)



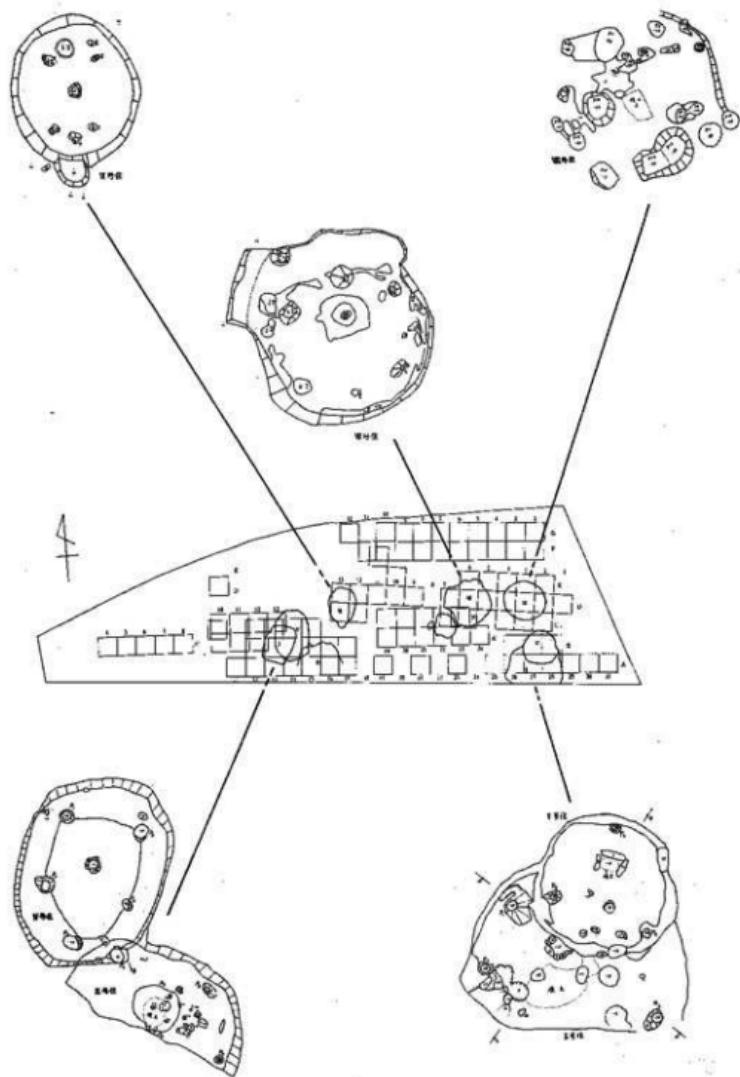
第36図 女大山ノ神道跡全体図・出土土器



第37図 女夫山ノ神遺跡出土遺物



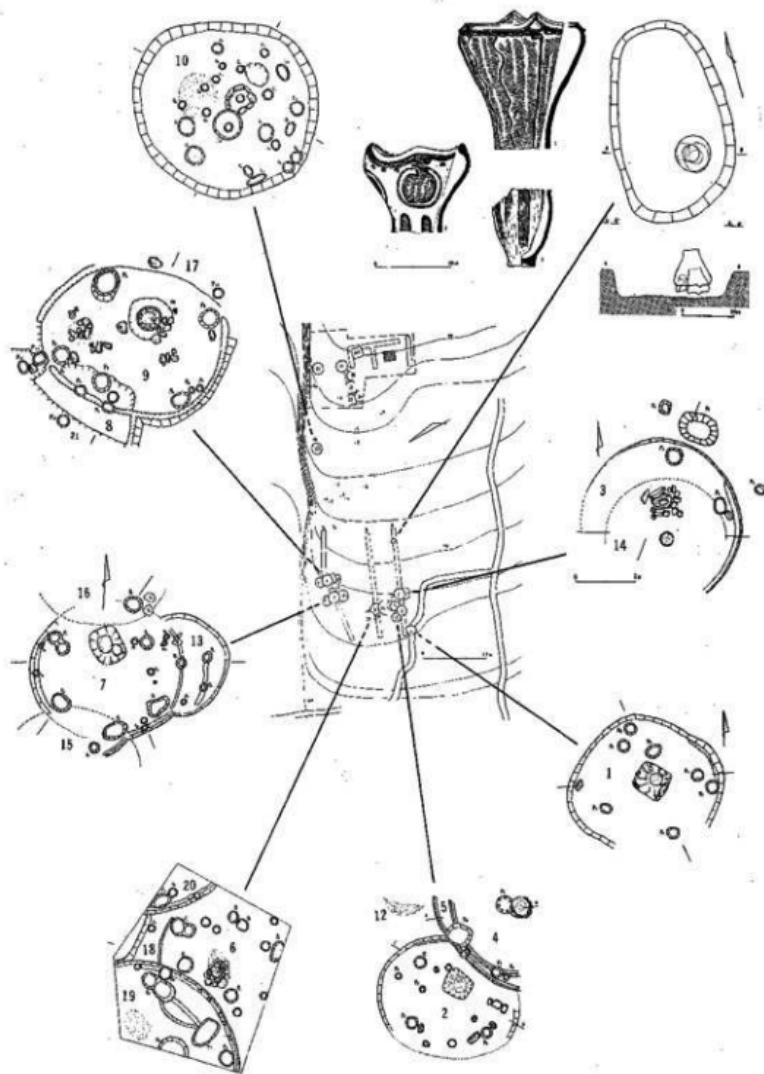
第38图 中原遗物全形图·出土器



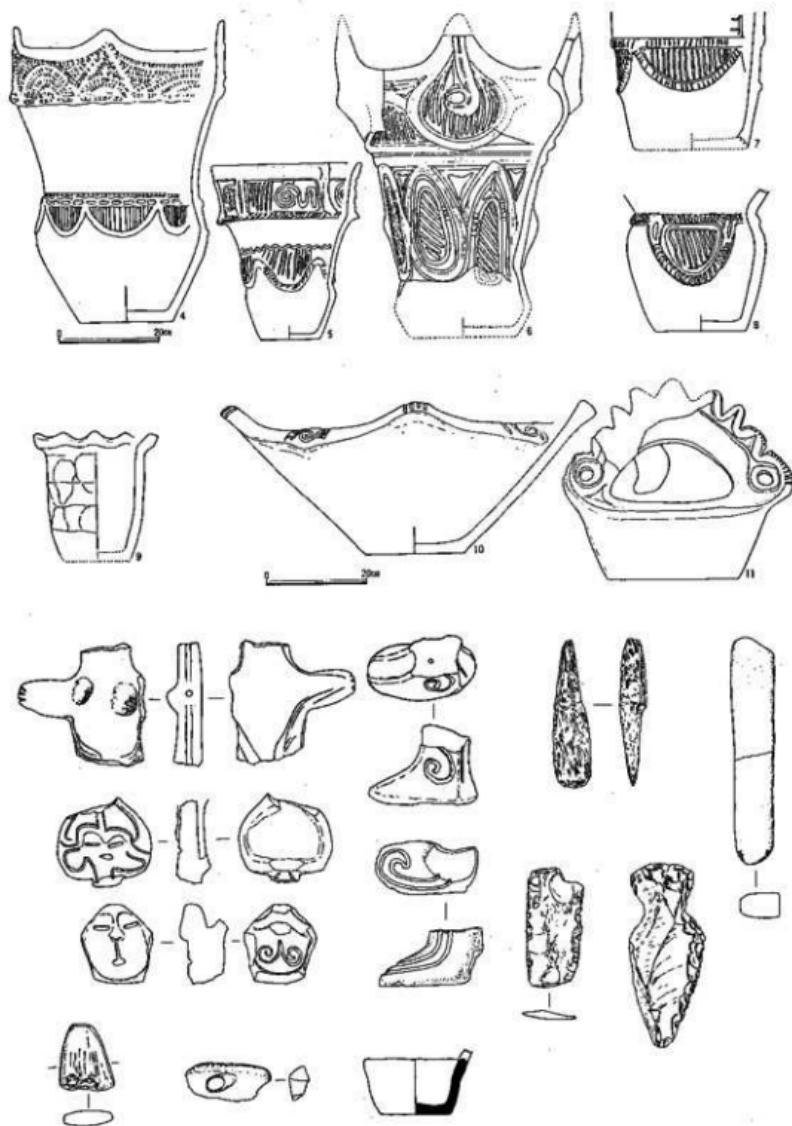
第39圖 墓原遺跡全体図



第40図 姉原遺跡出土土器(II号上2段、V号中2段、V4号下2段)



第41図 小九山遺跡全体図



第42図 小丸山遺跡出土遺物(上・6号住居址出土、下・小製品・石器)

第VII章 まとめ

山ノ神遺跡の調査区域は、遺跡の中心からはずれた周縁地域と考えられる。そのため、住居址の発見はなく、小竪穴、ロームマウンドが多数検出された。地元の方の採集品をみると、むしろ調査した地域より南側ないし南西側からの出土が多いようである。南洞川の縁辺に発達する台地が集落の中心地域となっていたものと推定される。

小竪穴は41基発見された。大半は出土遺物も少なく、ごく一般的なものであったが、多くの土器を出土した第22号、伏甕の出土した第36号は注目される。特に、36号例は、中期から後期にかけてみられる屋外葬の典型的な一例となるものであり重視される。

ロームマウンドは10基発見された。その用途ははっきりしたものではなく、わずかに風倒木説が提示されている程度である。しかし、今回の調査結果によると、山ノ神のロームマウンドについては自然的原因は考え難く、人為的なものであろうと結論づけられた。

検出された遺構は少なく、遺物も決して多くはなかったが、伏甕出土の小竪穴、ロームマウンドなど今後の類似遺構考証の基礎資料となるものである。

(小林康男)

第VIII章 結語

当遺跡は片丘の南内田地区に属し、山ノ神部落より山麓へ約500mくらい登った西斜面に位置し農家が数戸周囲に散在している。これより東方は山林地帯となり鳴神へと続く、この地からは北アルプスを目の前に松本平、安曇野の眺望は素晴らしいこの地を訪れた人ならばだれしもが胸を打たれる。

この調査は東山山麓地帯を農道整備事業として県が新設する事業に起因するもので、幻の山麓線ともいわれ地域住民の長年にわたる念願でもあった。このルートには5遺跡の発掘調査が予定されており山ノ神遺跡が最初の調査予定地である。またこの山麓地帯は当市内でも遺跡の宝庫であり近くには2遺跡が調査を終了している。そのうち内田原遺跡については、内田原は場整備により昭和43年12月～1月にかけ実施し、市内でのほ場整備事関連による発掘調査がこの頃より多くなって来た。内田原では土師式住居址、遺物は鉄器類で糸をつむぐ鉄製の紡錘車など、颗粒、葉むしろで約1000年前に米作りがはじまっていることが立証されている。また小丸山遺跡では、昭和44年2月にかけて調査が行われ、縄文式中期の竪穴住居址、石皿外土器片數千点が出土され土地の一部を公有化し、小丸山遺跡公園として休憩所、説明板を設置地元の協力により復原家屋が作られた。

山ノ神遺跡発掘調査は当初小雨等に見舞われたが後半好天に恵まれ調査も順調に進み終了することが出来ました。特に発掘作業に出役された方々は秋の農作業も一段落された南内田区婦人の方を中心に調査が行なわれました。

調査は10月16日～11月6日まで行われ、買収の道路巾内で進められ、中央部より下方に向って遺構遺物が検出されている。特徴として、溝状遺構、ロームマウンド（すり鉢状の穴の中心にローム（赤土）のかたまりがある）等が検出され、遺物については比較的少なかった。

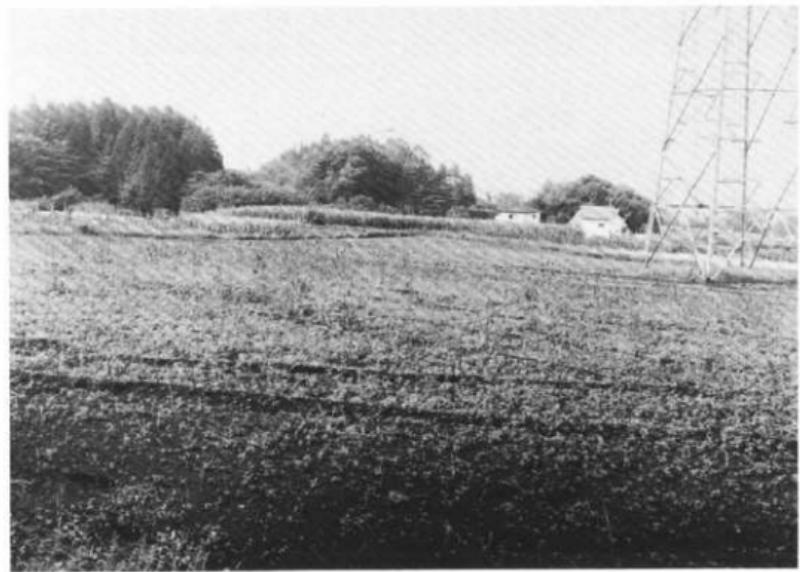
今回の調査は東山山麓線道路新設に伴う緊急発掘調査として市内ルートでは始めての発掘である。特に道路巾のみを発掘調査するのは近年例がなく、検出される遺構が中途で切れてしまう例が多く、調査による先人の生活文化の様子を解明するに至らない点も多分に見受けられる。これらの開発により破壊される記録保存が良いのか、調査されずに自然保存されているのが良いのかいずれにせよ、予算と時間がすべてを解決してしまう緊急発掘調査が現実の姿といえよう。この調査報告書が発刊される頃に新道路の建設が始まると予想される。本調査に御協力をいただいた南内田地区の皆さん、役員、調査員、調査補助員、関係各位、また冬期の間連日本調査まとめのために御協力をいただいた学生の皆さんに対し心より謝意を表するしだいです。

（中野 栄）

図 版



山の神遺跡遠景



全景（発掘前・北側より）



全景（発掘前・南側より）



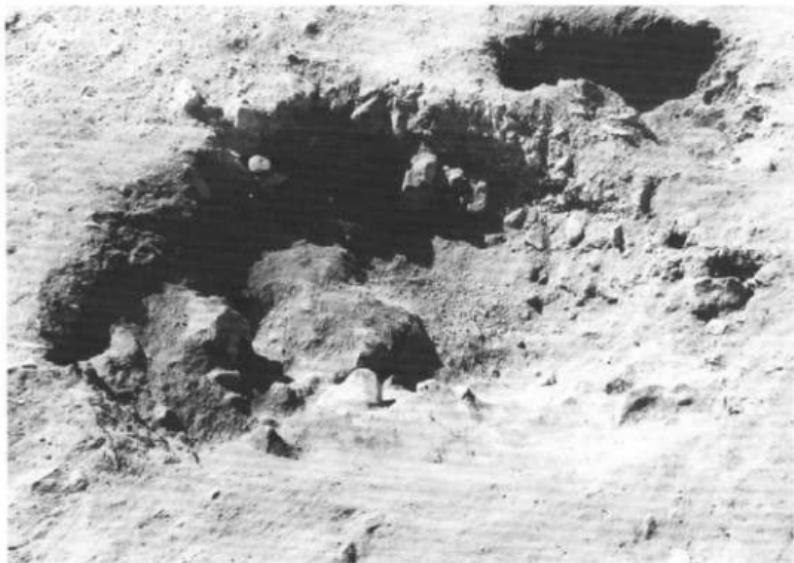
調査地区全景（南側より）



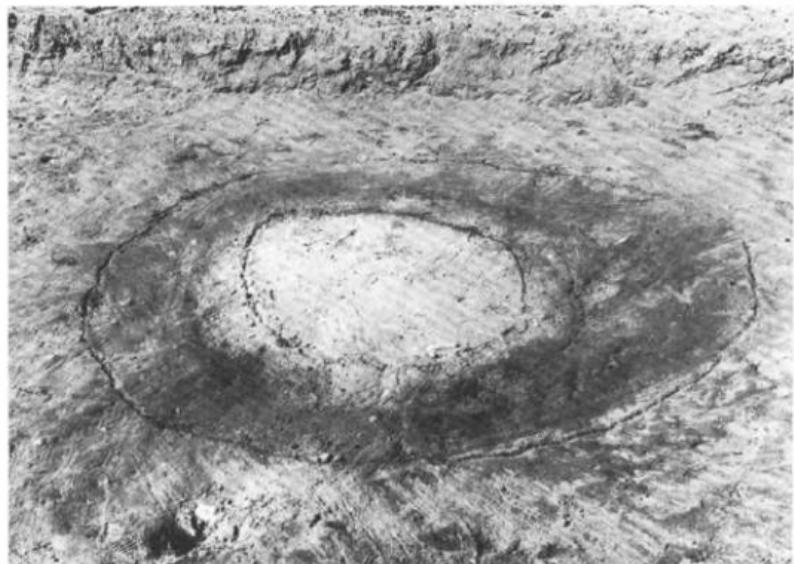
調査地区全景（北側より）



第1号ロームマウンド（断面）



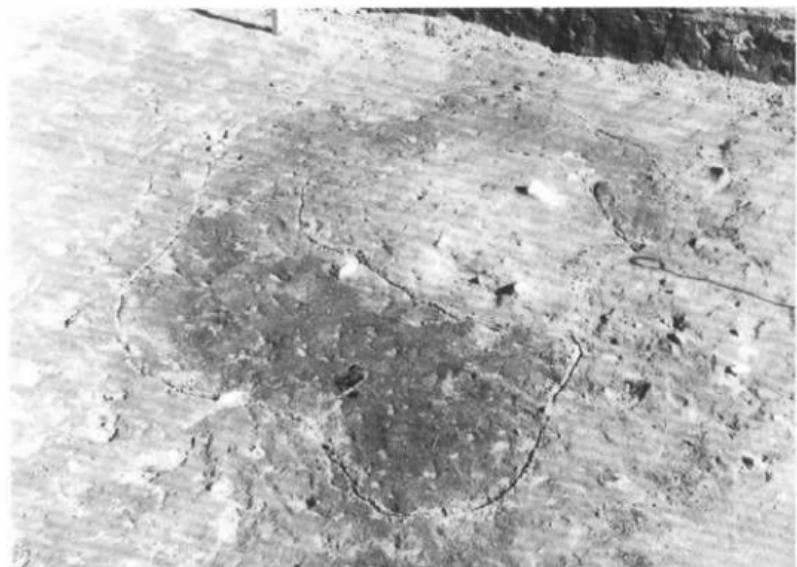
第1号ロームマウンド（完掘）



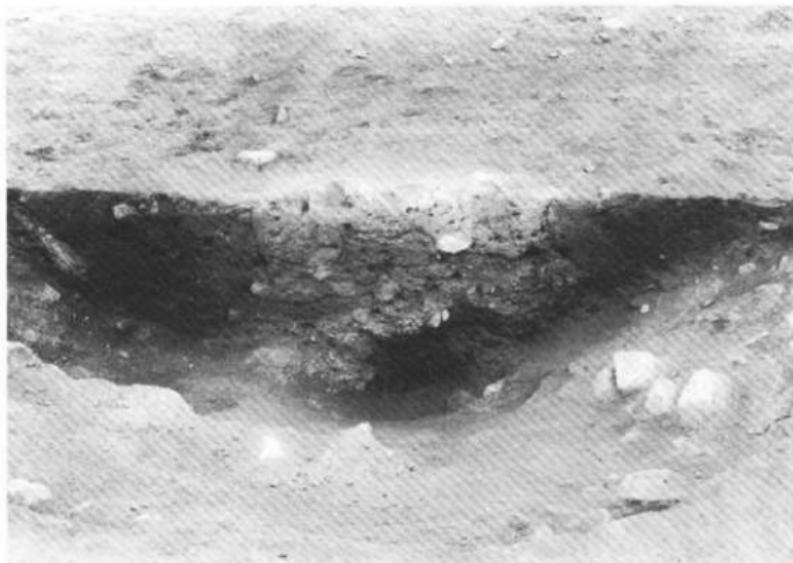
第2号ロームマウンド（検出面）



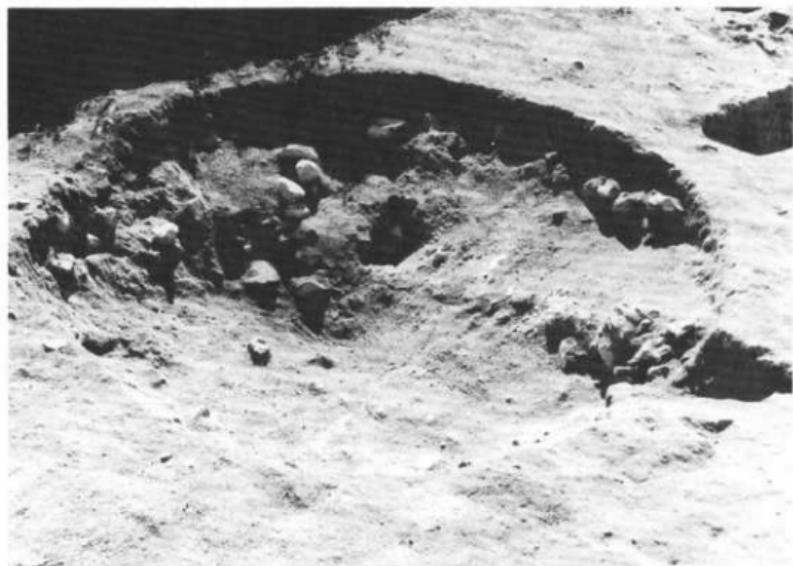
第2号ロームマウンド（完掘）



第3号ロームマウンド（検出面）



第3号ロームマウンド（断面）



第3号ロームマウンド（完掘）



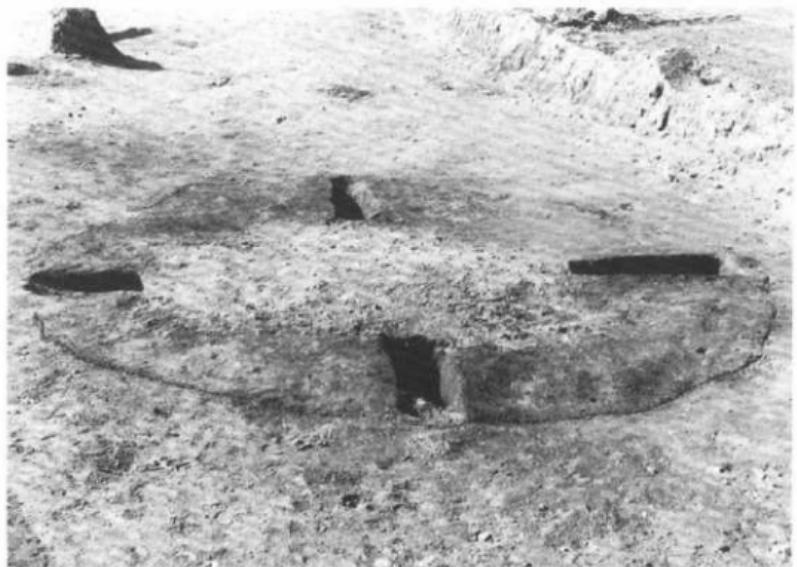
第4号ロームマウンド（検出面）



第4号ロームマウンド（断面）



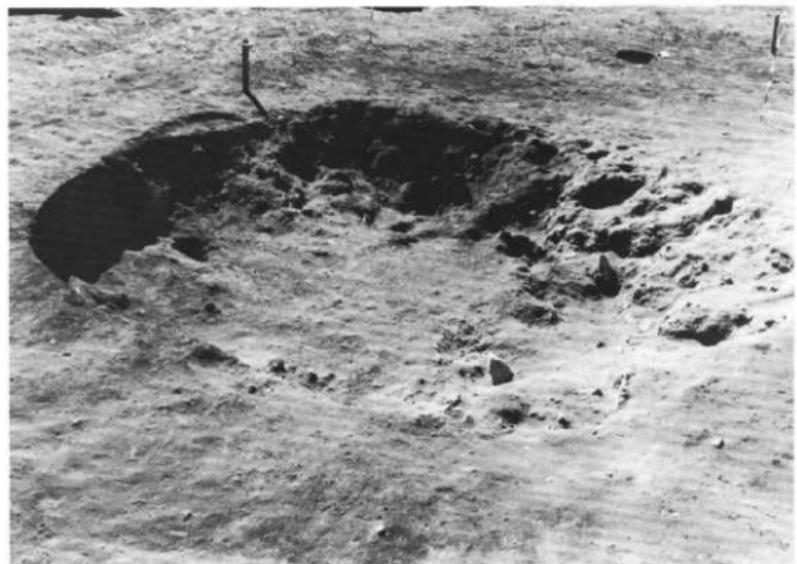
第4号ロームマウンド（完掘）



第5号ロームマウンド（検出面）



第5号ロームマウンド（断面）



第5号ロームマウンド（完掘）



第6号ロームマウンド（検出面）



第6号ロームマウンド（完掘）



第7号ロームマウンド（検出面）



第7号ロームマウンド（断面図）



第7号ロームマウンド（完掘）



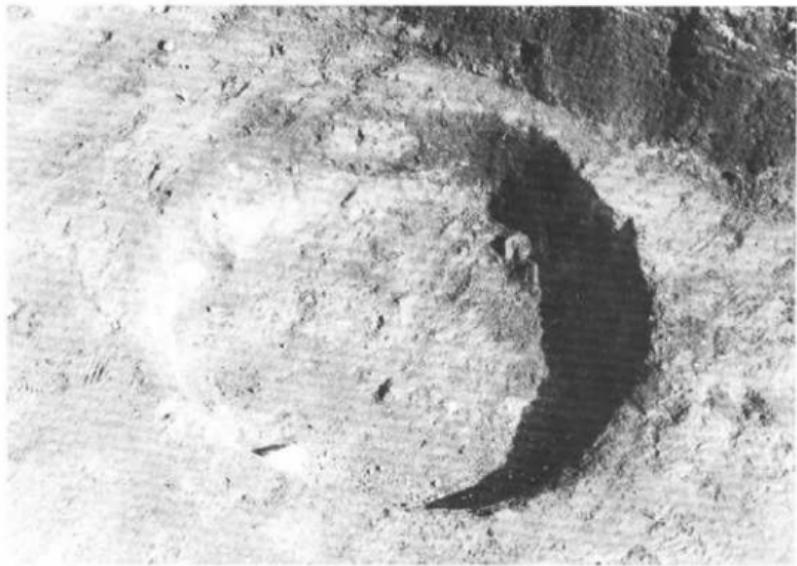
第8号ロームマウンド（断面）



第8号ロームマウンド（完掘）



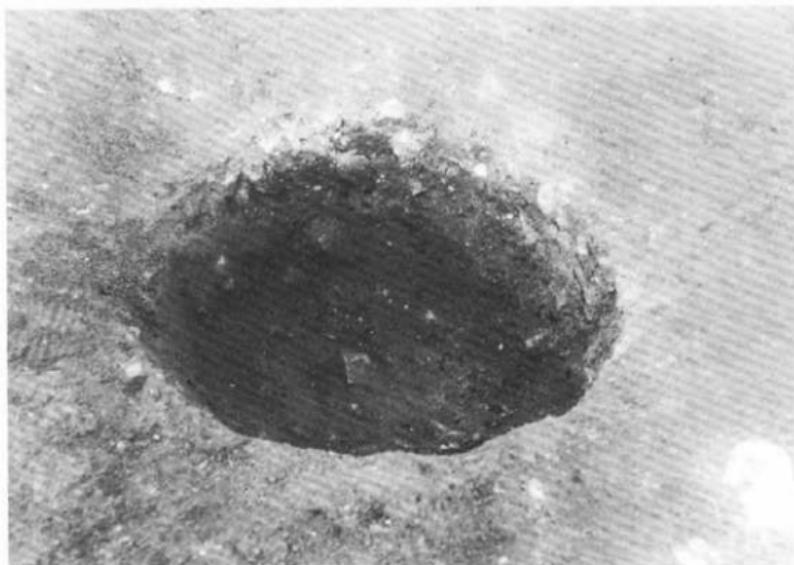
第9号、10号ロームマウンド（完掘）



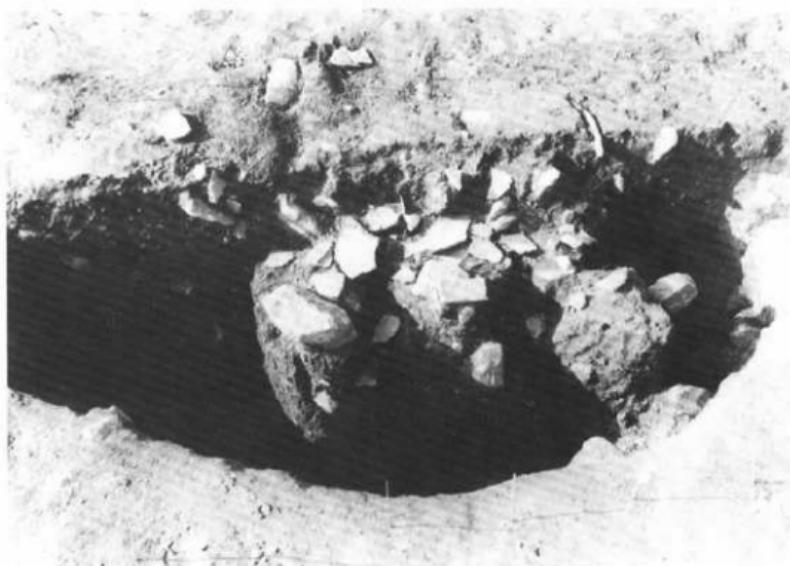
第4号小竖穴



第5号小竖穴



第15号小竖穴



第22号小竖穴（上面）



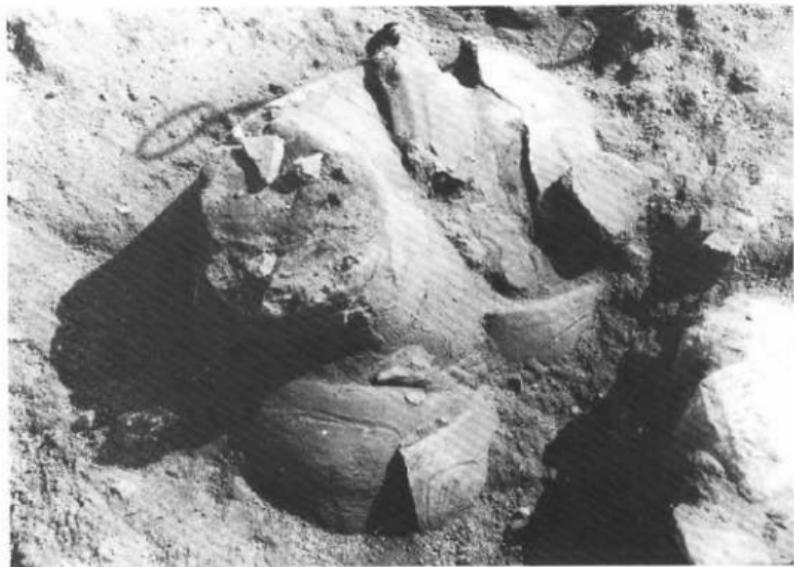
第22号小竖穴（完掘）



第22号小竖穴出土状态



第36号小堅穴



第36号小堅穴底窓



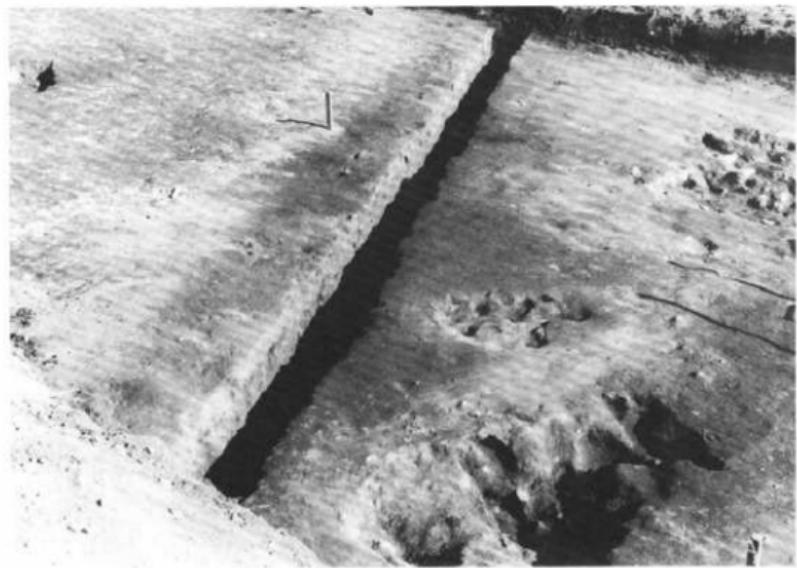
第36号小堅穴（完掘）



集 石



集 石



溝 状 遺 構



伏

裏



表土除去



調査開始式



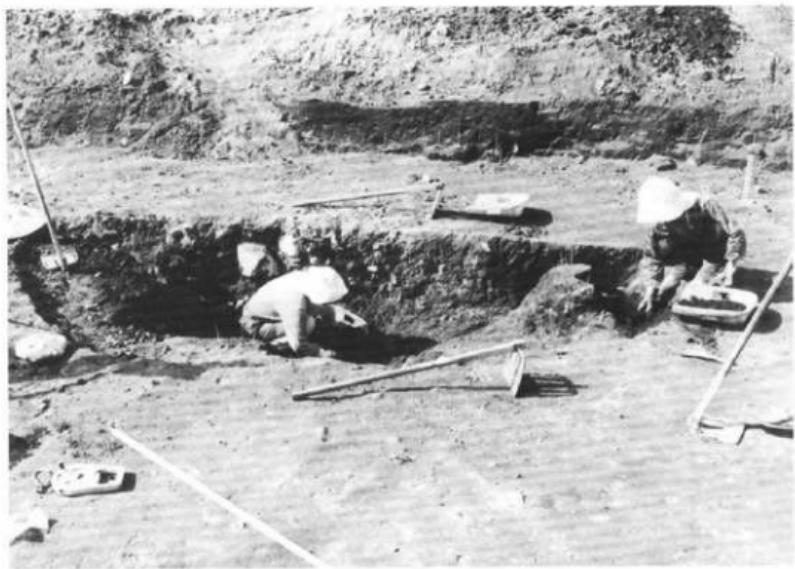
杭打ち作業風景



発掘作業風景



ロームマウンド発掘作業風景



ロームマウンド発掘作業風景



集石実測風景



ロームマウンドセクション作成風景



器材撤取



発掘参加者

山ノ神

—長野県塩尻市山ノ神遺跡発掘調査報告書—

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月22日 発行

発行 塩尻市教育委員会

